

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第236集

川口市

道合高木前遺跡

都市計画道路大宮東京線建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

2000

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



第 5 号土壙出土土器



第 3 号地下式壙出土遺物

序

埼玉県では豊かな彩の国づくりを目指し、県民が地域社会の中で、ゆとりと安らぎのある生活ができる基盤づくりを進めています。

人口の増加が著しくなかり、県民の生活を支えるための道路網の整備も、その一環として進められています。都市計画道路大宮東京線建設も、県民の快適な生活や地域間の連携を深めるための施策の一つとして計画されたものです。

都市計画道路大宮東京線用地内には、道合高木前遺跡の所在が確認され、その取扱いについては、関係機関が慎重に協議を重ね、記録保存の措置が講じられることになりました。そのための発掘調査は、埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課の調整により、当事業団が埼玉県の委託を受けて、実施しました。

遺跡の所在する川口市には、原始から中・近世にかけての遺跡が数多く分布しています。東京外環自動車道をはじめ、県道や都市計画道路の建設に伴う調査によって、貴重な遺跡の存在が明らかにされてきました。ト伝遺跡では、縄文時代早期の大規模な炉穴群が発見され、石神貝塚は縄文時代後・晩期の貝塚として、古くから知られています。赤山遺跡では、縄文時代後・晩期のトチの実加工場跡が発見されました。赤山陣屋跡遺跡は江戸時代の関東郡代伊奈半十郎忠治の館跡と

して有名です。

道合高木前遺跡では発掘調査の結果、縄文時代早期の炉穴や土壌をはじめ、古墳時代前期と平安時代の住居跡が発見されました。その他、中・近世の地下式塚、溝跡などが発見され、当地域における原始・古代から近世を通じての生活の様子を知る貴重な資料が得られました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。本書が、埋蔵文化財の保護に関する教育・普及の資料として、また学術研究の基礎資料として、広く御活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただいた埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県住宅都市部都市整備課、埼玉県浦和土木事務所、川口市教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成12年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県川口市に所在する道合高木前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届けに対する指示通知は、以下のとおりである。
道合高木前遺跡 (MTA I T K G M E)
川口市大字道合字高木前
平成10年4月24日付け教文第2-4号
平成10年12月17日付け教文第2-154号
平成11年6月3日付け教文第2-33号
3. 発掘調査は、都市計画道路大宮東京線建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。事業期間と担当者は以下のとおりである。
発掘調査
平成10年4月1日～5月31日
宮井英一、田中広明、渡辺清志
平成10年9月1日～11月30日
金子直行、若松良一
- 平成11年6月1日～30日
中村倉司、西井幸雄
整理・報告書刊行
平成11年12月20日～平成12年3月24日
君島勝秀
5. 遺跡の基準点測量及び空中写真撮影については、朝日航洋株式会社へ委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は、中村、金子、若松、宮井、西井、田中、渡辺が行い、遺物の写真撮影は橋本勉、大塚道則の協力を得た。
7. 出土品の整理及び図版の作成については、平安時代の遺物は磯崎一の協力を得、その他は君島が行った。
8. 本書の執筆は1-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、他を君島が行った。
9. 本書の編集は、君島が行った。
10. 本書にかかる資料は平成12年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
11. 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します。(敬称略)
川口市教育委員会、浅野晴樹

凡例

1. 本書におけるX、Yによる座標数値は、国土標準直角座標IX系に基づく座標値を示している。各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。
2. グリッドの区画は、調査区全体図に示し、10mを1単位とした。グリッド名は、北西隅の枕名称を用いた。
3. 挿図の縮尺は、スケールと縮尺率をその都度示したが、原則としては以下のとおりである。
[遺構] 住居跡・炉穴・土壌・地下式墳・地下室・井戸跡1/60
[遺物] 縄文土器実測図1/4
縄文土器拓影図1/3
磨石1/3
石鎌1/2
陶磁器・中・近世土器実測図1/3
播鉢1/4
砥石1/3
古銭1/2
4. 本書における遺構の略号は以下のとおりである。
S J (住居跡) F P (炉穴) S K (土壌) S E (井戸跡) S X (地下式墳) S Z (地下室) S D (溝) P (ピット)
5. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位はmである。
6. 遺構図および遺物実測図中のスクリーントーンは以下のものを示す。
 - ・住居跡内の炉跡・焼土
 - ・土器の赤彩
 - ・石器の被熱範囲・煤付着範囲
 - ・陶磁器の施釉
7. 遺構図・遺物分布図中に示した点と接合線は、遺物の出土位置と接合関係を示し、番号は遺物実測図のそれと一致する。
8. 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
 - ・法量の()内の数値は推定値であり、単位はcmである。
 - ・胎土は主に肉眼で観察された含有物を、以下の記号に示した。
白：白色粒子 赤：赤色粒子 黒：黒色粒子
酸：酸化鉄粒子 砂：小石・砂粒 雲：雲母
針：白色針状物 片：片岩 石：石英
 - ・焼成はA(良好) B(普通) C(不良)の3ランクに分類した。
 - ・色調・胎土色は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修1967)に照らし、最も近似した色相を記した。
 - ・残存率は、実測図に現れた部位を100%として算定したもので、5%刻みで表し、5%未満は省略した。
9. 第Ⅱ章に掲載した遺跡分布図は、建設省国土地理院発行の1/25,000地形図「浦和」「赤羽」を使用した。

目次

口絵

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	2. 古墳時代前期	24
1. 調査に至る経過	1	3. 平安時代	31
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	4. 中・近世	32
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	(1) 井戸跡	32
II 遺跡の立地と環境	4	(2) 地下式横・地下室	32
III 遺跡の概要	8	(3) 土壌	39
IV 検出された遺構と遺物	10	(4) 溝	39
1. 縄文時代	10	(5) ビット	51
(1) 炉穴	10	遺構新旧対照表	52
(2) 土壌	18	V まとめ	54
(3) グリッド出土遺物	21		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第12図 第5～15号炉穴	17
第2図 道合高木前遺跡と周辺遺跡	5	第13図 第5～7・12号炉穴出土遺物	18
第3図 遺跡位置図	7	第14図 土壌(縄文時代)	19
第4図 調査区全体図	9	第15図 土壌(縄文時代)出土遺物	20
第5図 第1号炉穴	11	第16図 グリッド出土遺物(縄文時代)(1)	22
第6図 第1号炉穴遺物分布図	12	第17図 グリッド出土遺物(縄文時代)(2)	23
第7図 第1号炉穴出土遺物(1)	13	第18図 第1号住居跡・出土遺物	24
第8図 第1号炉穴出土遺物(2)	14	第19図 第2号住居跡(1)	25
第9図 第1号炉穴出土遺物(3)	15	第20図 第2号住居跡(2)	26
第10図 第2～4号炉穴	15	第21図 第2号住居跡遺物分布図	26
第11図 第4号炉穴出土遺物	16	第22図 第2号住居跡出土遺物	27

第23図	第3号住居跡・出土遺物	29	第36図	第3号地下室	38
第24図	第4号住居跡	30	第37図	地下式竈・地下室出土遺物	38
第25図	第4号住居跡出土遺物	31	第38図	土壇(中・近世)(1)	40
第26図	第1号井戸跡	33	第39図	土壇(中・近世)(2)	41
第27図	第1号井戸跡出土遺物	33	第40図	土壇(中・近世)(3)	42
第28図	第1号地下式竈	34	第41図	土壇(中・近世)(4)	43
第29図	第2号地下式竈	34	第42図	土壇(中・近世)(5)	44
第30図	第3号地下式竈	35	第43図	土壇(中・近世)(6)	45
第31図	第4号地下式竈	35	第44図	土壇(中・近世)出土遺物	45
第32図	第5号地下式竈	36	第45図	第1～5号溝	48
第33図	第6号地下式竈	36	第46図	第6～26号溝・ピット	49
第34図	第1号地下室	37	第47図	溝出土遺物	50
第35図	第2号地下室	37			

図版目次

図版1	道台高木前遺跡遠景・近景	図版7	第2号住居跡・第1～3号地下式竈・第1号溝出土遺物
図版2	第1・4・5～7・10～12号炉跡・第1・2号住居跡	図版8	第4号住居跡・第2号地下式竈・第9号溝出土土器
図版3	第3・4号住居跡・第1号井戸跡・第1～3号地下式竈	図版9	第1号炉穴出土土器
図版4	第4～6号地下式竈・第1・2号地下室・第9号溝	図版10	第1・4号炉穴出土土器
図版5	第1・4号炉穴・第5号土壇・第1・2住居跡出土土器	図版11	第5～7・12号炉穴・第1・3～5号土壇出土土器
図版6	第2号住居跡出土土器	図版12	グリット出土土器(縄文時代)

I 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

埼玉県では、県内を5つの複合都市圏に分け、地域の調和と均衡ある発展の実現を目指している。

浦和市、大宮市、川口市を中心とした中央複合都市圏では首都機能を含めた高次都市機能や、次世代産業などの集積を目指した新産業拠点の整備を進めているところである。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進と文化財の保護について、従前から関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

都市計画道路大宮東京線にかかる埋蔵文化財の所在および取扱いについては、平成10年2月25日付け都整第1521号で、埼玉県住宅都市部都市整備課長から埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課長あて照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果とともに、平成10年3月6日付け教文第1541号で、道合高木前遺跡の取扱いについて次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

工事予定地内には以下の埋蔵文化財包蔵地が存在する。

名称 (No.)	種別	時代	所在地
道合高木前遺跡 (02-061)	集落跡	縄文	川口市大字道合字高木前

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく文化庁長官当への発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と都市整備課及び文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などを中心に協議が行われた。その結果、平成10年4月1日から5月31日まで、同年9月1日から11月30日まで、平成11年6月1日から6月30日の期間で実施することになった。

埼玉県知事から文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が提出され、各調査に先立ち、第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査に係る通知は以下のとおりである。

道合高木前遺跡

平成10年4月24日付け	教文第2-4号
平成10年12月17日付け	教文第2-154号
平成11年6月3日付け	教文第2-33号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

第1次調査

調査は平成10年4月1日から5月31日までの2ヶ月間実施した。調査対象地の現況は、一部民家を含む畑地である。調査区は都市計画道路の建設予定区域のため、幅約20～30m、全長約230mで、尾根状の地形を縦断するように設けられた。全体の調査面積は5,600m²である。このうち、第1次調査は、調査区西部から中央部にかけての区域である(第4図)。調査面積は2,500m²である。

事務所ユニットの設置、調査区域の囲柵から開始し、重機を用いて表土除去し、直ちに遺構の確認作業に入った。表土除去の結果、調査区中央部北半は、第二黒色帯下面までカットされており、この部分には溝などの比較的新しい時期の遺構だけが存在していた。造成を免れた部分も、耕作やゴミ穴などの攪乱に覆われていたが、それらの間を縫って、遺構群が検出された。

第1次調査で検出された遺構は、縄文時代早期の炉穴4基、土壇8基、古墳時代前期の住居跡3軒、中・近世の井戸跡1基、地下式竈2基、土壇7基、溝5条である。

遺構確認後、直ちに基準点の測量を行い、10m1単位のグリッドを設定した。5月中旬には、全ての遺構精査を完了し、遺構の平面図作成を行った。また、各遺構の写真撮影を行った。5月下旬には、航空写真撮影を実施し、遺物、図面などの記録類の引き上げ、事務所ユニットの撤去を行い、全ての作業を終了した。

第2次調査

調査は平成10年9月1日から11月30日までの3ヶ月間実施した。全調査区域のうち、調査区東部にあたり、一部民家の立ち退きが完了していない西側を除いた区域である(第4図)。調査面積は2,800m²である。

事務所ユニットの設置、重機による表土除去作業を行った。表土の除去は、ソフトローム層まで掘り下げて遺構確認を行った。東側部分は台地の傾斜面となり、この傾斜面にかかる部分から主に縄文時代早期の炉穴

や土壇、中・近世の土壇や溝が検出された。

第2次調査で検出された遺構は、縄文時代早期の炉穴11基、土壇3基、中・近世の地下式竈4基、土壇25基、溝15条である。

11月中旬には、各遺構の精査をほぼ完了し、遺構の写真撮影と平面図作成を開始した。11月下旬には、航空写真撮影を完了し、器材の引き上げ、事務所ユニットを撤去し、全ての作業を終了した。

第3次調査

調査は平成11年6月1日から30日までの1ヶ月間実施した。民家が建っていたために調査できなかった区域で(第4図)、調査面積は300m²である。

重機によって表土除去し、遺構確認を行った。調査区内は民家が存在していたため、攪乱が多数あった。

第3次調査で検出された遺構は、中・近世の地下室3基、土壇49基、溝6条である。

各遺構の精査後、遺構の写真撮影と平面図作成を行い、6月下旬には、器材の引き上げ、事務所ユニットを撤去し、全ての作業を終了した。

(2) 報告書作成

平成11年12月20日から平成12年3月24日までの期間実施した。12月から出土遺物の接合・復元作業を行い、並行して遺構図面の第2次原図の作成を行った。翌年1月から遺構図のトレースを開始し、2月中旬には遺構図版の作成を終了した。

一方、接合・復元を完了した遺物については翌年1月から実測・拓本を開始した。2月初旬から遺物実測図のトレースを開始し、2月中旬には遺物図版の作成を終了した。

写真については2月中旬に遺物の撮影を行い、遺構と遺物の写真図版を作成し、2月下旬に完了した。

2月から原稿の執筆を行い、2月下旬には割付作業を完了した。2月末に入校し、校正作業を経て3月下旬に報告書を発行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査

平成10年度(第1・2次調査)

理 事 長 荒 井 桂
副 理 事 長 飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 鈴 木 進

管理部

専門調査員兼経理課長 関 野 栄 一
主 任 江 田 和 美
主 任 福 田 昭 美
主 任 菊 池 久 隆
庶 務 課 長 金 子 隆
主 査 田 中 裕 二
主 任 長 滝 美 智 子
主 事 腰 塚 雄 二

調査部

調 査 部 長 谷 井 彪
調 査 部 副 部 長 水 村 孝 行
調 査 第 三 課 長 浅 野 晴 樹
統 括 調 査 員 若 松 良 一
統 括 調 査 員 金 子 直 行
統 括 調 査 員 宮 井 英 一
主 任 調 査 員 田 中 広 明
調 査 員 渡 辺 清 志

平成11年度(第3次調査)

理 事 長 荒 井 桂
副 理 事 長 飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 広 木 卓

管理部

管理部副部长兼経理課長 関 野 栄 一
主 任 福 田 昭 美

任 腰 塚 雄 二
任 菊 池 久 隆
庶 務 課 長 金 子 隆
主 査 田 中 裕 二
主 任 江 田 和 美
主 任 長 滝 美 智 子

調査部

調 査 部 長 増 田 逸 朗
調 査 部 副 部 長 水 村 孝 行
主 席 調 査 員 杉 崎 茂 樹
統 括 調 査 員 中 村 倉 司
統 括 調 査 員 西 井 幸 雄

(2) 整理・報告書刊行

(平成11年度)

理 事 長 荒 井 桂
副 理 事 長 飯 塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 広 木 卓

管理部

管理部副部长兼経理課長 関 野 栄 一
主 任 福 田 昭 美
主 任 腰 塚 雄 二
主 任 菊 池 久 隆
庶 務 課 長 金 子 隆
主 査 田 中 裕 二
主 任 江 田 和 美
主 任 長 滝 美 智 子

資料部

資 料 部 長 高 橋 一 夫
専門調査員兼資料部副部长 石 岡 憲 雄
主 任 調 査 員 君 島 勝 秀

II 遺跡の立地と環境

道合高木前遺跡は、J R宇都宮線・高崎線の西川口駅から北東へ約4.7km、川口市役所から北へ約4.3kmに位置する。

埼玉県南部の川口市は、地形的には大宮台地の南端と荒川低地にあたる。大宮台地南端部は、鳩ヶ谷支台と呼ばれ、西部から南部にかけては、現在の芝川流路となる河川低地が台地を画している。低地に向けて開けた無数の小支谷と、台地を縁取る崖線が複雑に入り組み、台地上には後期旧石器時代から江戸時代にかけての遺跡がまなく分布する。道合高木前遺跡は、こうした台地上に占地する数多くの遺跡群のひとつである。

川口市は、中世には「鎌倉街道」、近世では「御成街道」の沿道として発展してきた地域であり、北関東と鎌倉、あるいは日光と江戸とを結ぶ交通の要衝となってきた。その役割は現在にも受け継がれ、外環道、東北自動車道、首都高川口線を結ぶ川口ジャンクション

建設後、都心近郊と北関東・東北方面を繋ぐ、東西南北の交通拠点となっている。

こうした地域的特性と都市化の要請の中で、川口市に分布する無数の遺跡群の調査は、主に外環道、県道やそれらに関連する都市計画道路の建設による事前調査に負うところが大きかったといえる。卜伝遺跡(4)、八本木遺跡(2)、赤山陣屋跡遺跡(7)、野伝場遺跡(10)などの調査がこれにあたる。

卜伝遺跡では、縄文時代早期、貝殻条痕文期の大規模な炉穴群が検出されている(埼玉県教委1980)。

縄文早期の炉穴については、八本木遺跡でも、同時期の土壇とともに検出されている。八本木遺跡では、この他に平安時代の住居跡2軒、中世の地下式藏、近世の地下室が検出されており(浜野・西井1989)、今回報告する道合高木前遺跡でも、同様の遺構が検出されていることから、関連性が注目される。地下式藏は13基検出され、主体部から人骨も検出されている。地

第1図 埼玉県の地形



第2図 道合高木前遺跡と周辺遺跡



- 1 道合高木前遺跡 2 八本木遺跡 3 叭原遺跡 4 卜伝遺跡 5 石神貝塚 6 源長寺前遺跡
7 赤山陣屋跡遺跡 8 宮合貝塚 9 海道西遺跡 10 野仔場遺跡 11 東野遺跡 12 古峰神社遺跡

下式墳は15～16世紀、地下室については、江戸時代以降の農業史からアプローチされ、18～19世紀とされている。

赤山陣屋跡遺跡は、江戸時代の関東郡代伊奈半十郎忠治の館跡として知られている。調査の結果、関連する近世の堀も検出されたが、それにもまして重要なことは、低湿地部から縄文時代後・晩期のトチの実加工場跡が発見されたことである（金箱他1989）。この遺構は良好な遺存状態で検出されたこともあって、縄文時代の生業を研究する上で、重要な資料となっている。

野伝場遺跡では、縄文後期、称名寺式期の住居跡1軒、土壌17基が検出されている（斉藤・金箱1982）。

こうした近年の開発による事前調査の一方で、古くから注目され、学術的な発掘が行われてきたのが、石神貝塚である（5）。1930年に大山史前学研究所が行った調査が第1回目となり、以後何度も調査が行われて

いる。近年では当事業団による調査によって、後期加曾利B式期を主体とする遺構が検出されている（元井他1997）。

この他、宮合貝塚（8）は、縄文中期から晩期にかけての遺物を出土している貝塚として知られている（金箱他1983）。

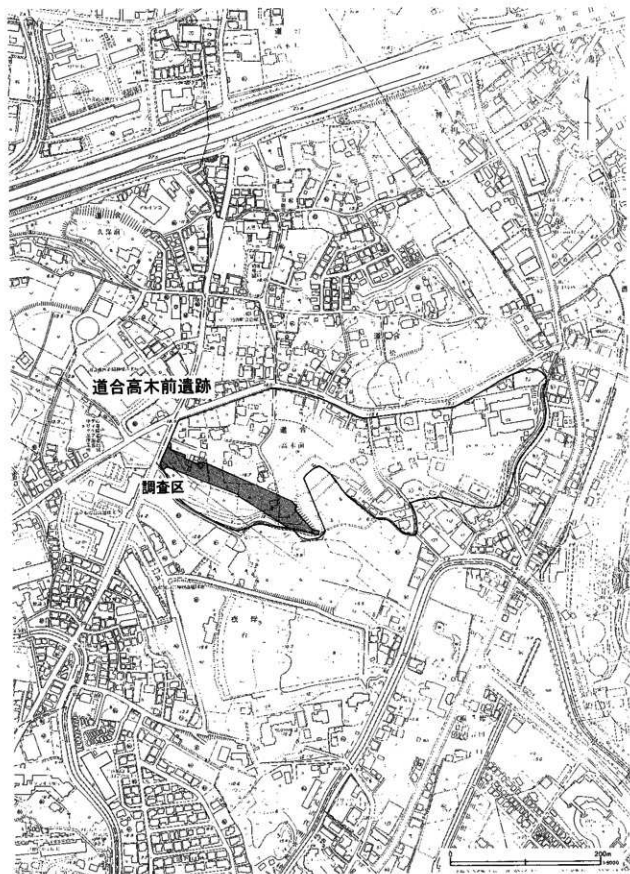
今回報告する道合高木前遺跡では、縄文早期、条痕文期の炉穴がまとまって検出された。この点では、周辺の遺跡群には、同じ時期の炉穴が多く検出されている。前述の卜伝遺跡、八本木遺跡の他、叭原遺跡（3）では、条痕文期の住居跡1軒、炉穴15基が検出された（吉田他1985）。

源長寺前遺跡（6）でも、同じく条痕文期の住居跡1軒の他、炉穴38基、土壌76基が検出され、注目される（吉田他1991）。

引用・参考文献

- 金箱文夫他 1983 『宮合貝塚遺跡』 川口市遺跡調査会報告第4集 川口市遺跡調査会
金箱文夫他 1989 『赤山』 川口市遺跡調査会報告第12集 埼玉県川口市遺跡調査会
川口市 1988 『川口市史 通史編』
埼玉県教育委員会 1980 『卜伝』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第25集 埼玉県教育委員会
斉藤浩朗・金箱文夫他 1982 『野伝場遺跡・東野遺跡』 川口市遺跡調査会報告第3集 川口市遺跡調査会
浜野美代子・西井幸雄 1989 『八本木遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第77集
元井 茂他 1997 『石神貝塚』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第182集
吉田健司他 1985 『叭原遺跡』 川口市文化財調査報告書第23集 川口市教育委員会
吉田健司他 1991 『源長寺前』 川口市遺跡調査会報告第15集 埼玉県川口市遺跡調査会

第3図 遺跡位置図



Ⅲ 遺跡の概要

通高木前遺跡は大宮台地南端の鳩ヶ谷支台に位置している。遺跡ののる台地は、北から荒川低地に向けて舌状に張りだし、無数の小支谷と崖線が入り込む複雑な地形を呈している。

台地の西側から南側に向っては、芝川が蛇行して低地を形成し、台地の崖線に沿って、見沼代用水が流れている。遺跡の標高は最高所で18m、沖積面は約5mを測り、約13mの比高差になる。

調査対象地の現況は、一部民家を含む畑地である。調査区は都市計画道路の建設予定区域のため、幅約20～30m、全長約230mで、尾根状の地形を縦断するように設けられた(第3図)。調査面積は5,600㎡である。

表土除去の結果、調査区中央部の北半は第二黒色帯下面まで削平されていた。この部分に構築された溝(SD1)の覆土中から近世の陶器類に混じって寛永通寶が出土したため、この段状の削平は、近世のある時期か、それ以前に行われたものと考えられる。その他、調査区西部は広範囲に攪乱されていた(第4図)。

遺構確認面の標高ラインは、調査区西部のE-5・F-5グリッド付近が17.8mと最も高く、南東に向けて緩やかに傾斜しながらも平坦部が狭く。調査区東部のR-10グリッド周辺の14.0m以後、傾斜面となる。

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代早期条痕文期の炉穴15基、土壇11基、古墳時代前期の住居跡3軒、平安時代の住居跡1軒、中・近世の井戸跡1基、地下式竈6基、地下室3基、土壇81基、溝26条、ピット61基である。

縄文時代早期の炉穴は、調査区西部から中央部にかけて点在する一方、調査区東部のR-11杭周辺からまとまって検出された。FP1は標高の最も高い部分で検出された。炉床部が複数に及ぶことから、反復的に使用されたものと考えられる。底面から覆土中にかけて、早期条痕文系土器が復元可能な個体も含めて出土した。調査区中央のFP4では、復元可能な条痕文土器とともに、鶺鴒島台式土器の破片が出土している。

FP5～15は調査区東部の平坦面から傾斜面にかかる部分で、まとまって検出された。出土遺物は少ないが、覆土の状況から同じく早期条痕文期のものと思われる。

土壇は調査区中央のFP4の東側周辺と、FP5～15のまとまりの近くから検出された。出土遺物と覆土の状況から、同様に早期条痕文期の土壇と思われる。SK5では、条痕文土器の破片とともに、復元可能な鶺鴒島台式土器が出土した。

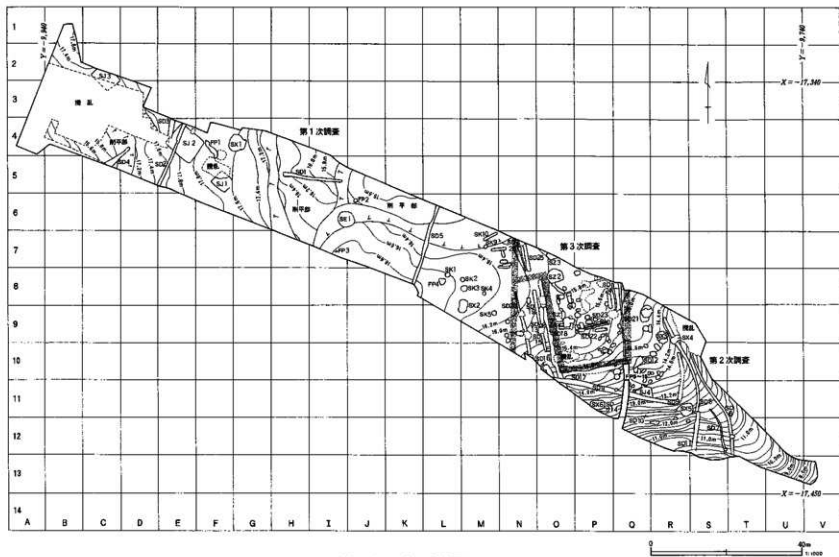
古墳時代前期の住居跡は、調査区西部でSJ1～3が、線上に点在している。SJ2は長さ8.4mの住居跡であり、台付甕、壺、器台の他、土玉が出土した。

平安時代の住居跡はSJ4で、調査区東部で検出された。北壁にカマドを持ち、中世の溝に半分切られるものの、カマドと周辺部から須恵器坏が出土している。出土遺物から9世紀後半の住居跡と考えられる。

中・近世の遺構としたものは最も多く、このうち出土遺物から判断して、中世と考えられる遺構は、SE1、SX1～3・6、SD9である。SE1からは15世紀後半の灰釉盤の破片、16世紀前半の焙烙破片、13世紀代の常滑甕の破片などが出土した。SX1～3は、幅広い女室に入口部が付くもので、SX3からは、輸入青磁の合子蓋が出土した。15世紀代のものと思われる。SX6からは15世紀代の青磁碗の底部が出土した。

SD9は調査区東部の台地の落ち際を巡るようにL字形に伸びる。断面形は逆台形を呈する。15世紀後半の緑釉小皿が出土しており、中世の屋敷堀であると考えられる。

その他、土壇については調査区東部を中心に、81基検出された。出土遺物から遺構の時期を特定できるものはなく、覆土の状況から大半が近世以降と思われる。SD9以外の溝については、SD10・11が屋敷堀、その他は近世以降の区画溝と思われる。ピットは調査区東部に61基検出された。ほとんどのものが近世以降と思われる。



第4图 調査区全体图

IV 検出された遺構と遺物

1. 縄文時代

(1) 炉穴

第1号炉穴(第5・6図)

F-4・5グリッドに位置する。北西-南東方向にやや不定形に伸びる。炉床部が4ヶ所見られることから、繰り返し使用されたものと思われる。長さ5.2m、幅1.3m、深さ58cmを測る。

出土遺物は、炉床部を中心に底面から覆土下層にかけて分布する。田戸下層式が2片の他、縄文早期の条痕文系土器が主体である。

出土遺物(第7～9図)

第1類土器(4・5)

胎土には繊維を含まず、沈線で文様を描くもので、田戸下層式と考えられる。斜めと縦に沈線を描く。5は横線で区画する。混入と思われる。

第2類土器(2・9～15・20・25・26・31)

胎土に繊維を含み、内外面に明瞭な貝殻条痕文を施す土器である。2は炉穴中央部の底面からまともに出土したもので、口縁部から胴部までの復元個体、9～15は同一個体で北側炉床部から出土した。

2は、口縁がやや開いて立ち上がる器形で、底部は尖底と思われる。口縁は平縁で、1ヶ所凹みが増えらる。口唇部はやや内削ぎ状に薄くなり、尖りぎみになる。内外面ともに、口縁には横方向、胴部には縦または斜方向に貝殻条痕文を施す。

9～15は、口縁から胴部までの同一個体である。9・10の口縁部は平縁で、9には補修孔が見られる。

20・25・26は胴部、31は底部近くと思われる。

第3類土器(3・6～8・18・21・24・28・30)

胎土に繊維を含み、内外面に粗く浅い貝殻条痕文が見られる土器である。明瞭な貝殻条痕文を施す第2類土器とは明確に区別できる。焼成はやや悪く内面が剥落しているのが目立つ。

3は同一個体で、北側炉床部から出土した。口縁部は平縁になり、胴部でやや膨らみを持つ。口唇部は丸

くなる。内面は貝殻条痕文が顕著に見られるが、胴下部ではなで消しており、所々に残る程度である。外面は貝殻条痕文を粗く浅めに施文し、擦痕状にも見える。口縁部は、内外面とも横方向になでられ無文になる。

6～8・21・24・28・30は胴部である。

18は口縁部で口唇が外反し、平坦になる。外面は擦痕状、内面には一部貝殻条痕が残る。

第4類土器(1・22・23・27)

胎土に繊維を含み、内外面に擦痕文を施す土器である。擦痕文は半截竹管状または茎状の工具によって粗く施文するもので、第2類、第3類の貝殻条痕とは明確に区別できる。

1は、胴部の傾斜から見て尖底になると思われる。やや厚手の土器で、北側の炉床部を中心にまともに出土したものである。内外面とも縦方向に擦痕が見られ、外面には一部横方向からも加えられる。

22・23・27は胴部で、異方向に擦痕が見られる。

第5類土器(16・17・19・29)

胎土に繊維を含み、指頭による成形痕を残す土器である。条痕文や擦痕文が見られず、やや薄手である。

第2号炉穴(第10図)

J-6グリッドに位置する。近世の削平によって、炉床部のみが残る。直径0.9m、深さ4cmを測る。

第3号炉穴(第10図)

I-7グリッドに位置する。炉床部のみが残る。直径0.4m、深さ6cmを測る。

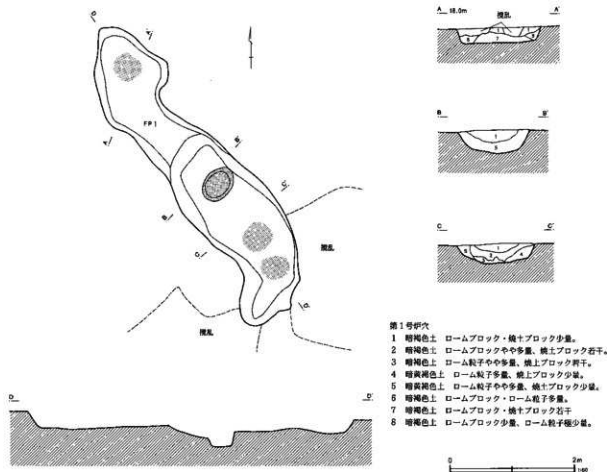
第4号炉穴(第10図)

L-8グリッドに位置する。平面形は不定形で、底面には段差がある。最も深い底面に炉床部が位置する。長さ1.8m、幅1.6m、深さ46cmを測る。

出土遺物(第11図)

覆土中から第11図1～18が出土した。鶺鴒ヶ島台式の有文土器が1点で、他は条痕文土器である。2は鶺鴒ヶ島台式土器で、先の尖った工具による細い沈線と刺突

第5図 第1号炉穴



文、幅広い充填沈線によって文様が構成される。内面には条痕文が見られ、胎土には繊維を含む。

1・3～18は、胎土に繊維を含む、条痕文土器である。内外面に条痕が施される。

1は器形のわかる個体で、底部は尖底と思われる。直線的に開く器形で口縁は平縁になり、1ヶ所凹みが増えられる。口唇はやや尖りぎみになる。条幅の比較的広い条痕文を施す。口縁部付近は内外とも横になでられる。補修孔が1ヶ所見られる。

3は、やや外反する口縁部で、口唇に連続押圧が加えられる。4～18は、胴部破片である。ほとんどが条幅の狭い密な貝殻条痕文だが、6は1と同様の条幅の広い条痕、9はやや粗い条痕を施す。11・16は外面に貝殻背圧痕が見られる。

第5号炉穴 (第12・13図)

Q-10グリッドに位置する。中・近世のSK55に北側を切られる。平面形は楕円形。短軸1.2m、深さ36cm、主軸方位はN-4°-Eを測る。炉床部は検出されなかったが、底面から覆土にかけて、焼土と炭化物が多く検出されたことから、隣接するFP6と同様の炉穴と考えられる。

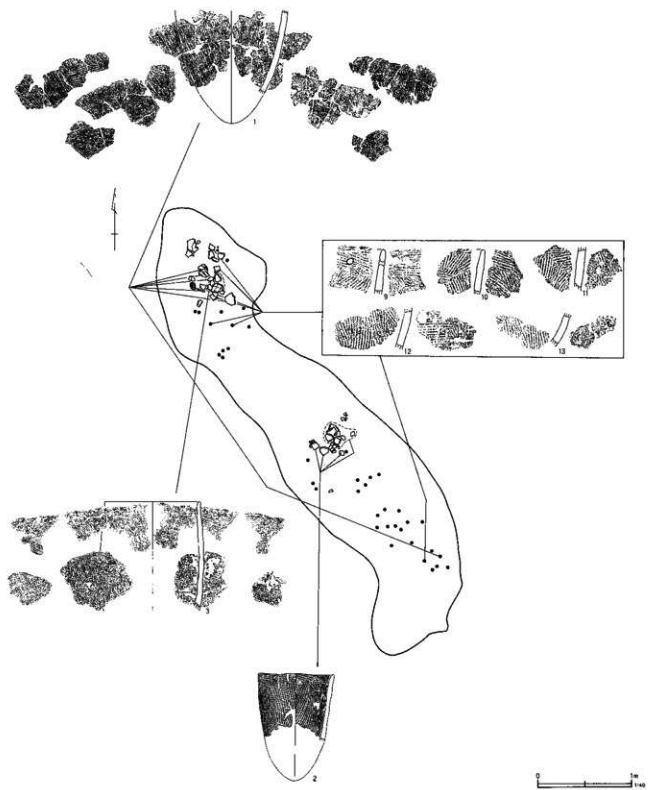
覆土中から第13図1が出土した。早期条痕文土器である。胎土には繊維を含む、内外面に密に条痕を施す。

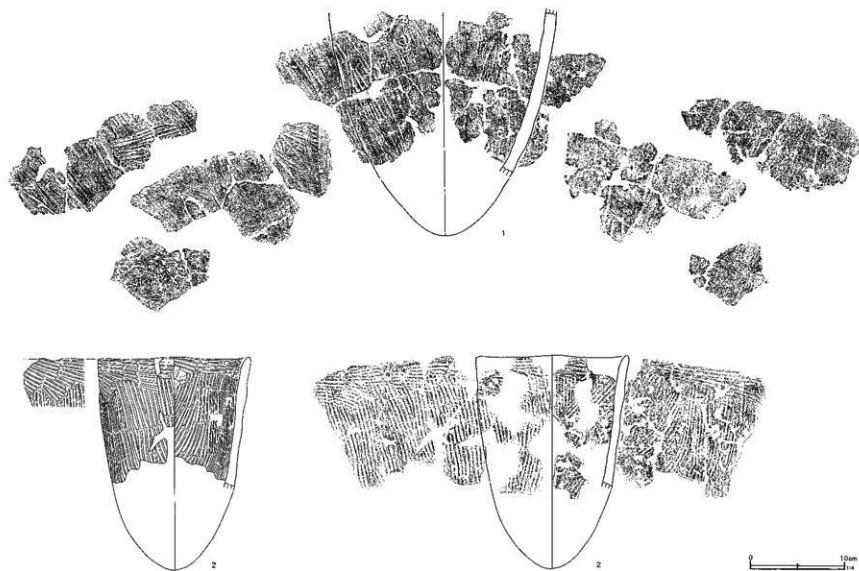
周辺部は調査区内の平坦面が、傾斜面にかかる区域である。ここにFP5の他、FP6～15がまとまって分布しており、これらの炉穴はある時期の一定期間内に構築されたものと考えられる。なお、西側には同じ時期の土壌であるSK48～50も隣接する。

第6号炉穴 (第12・13図)

Q-10グリッドに位置する。平面形は楕円形で、底

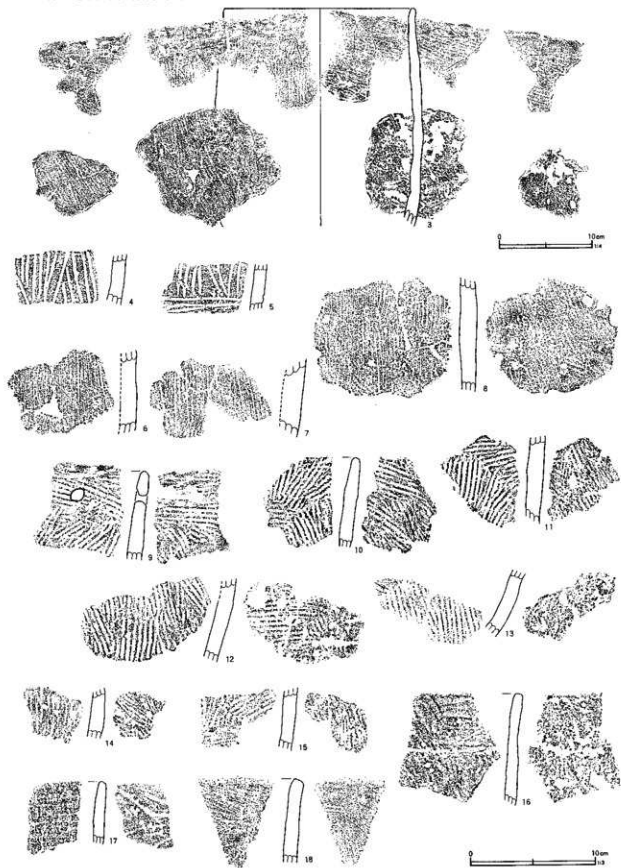
第6图 第1号炉穴遗物分布图



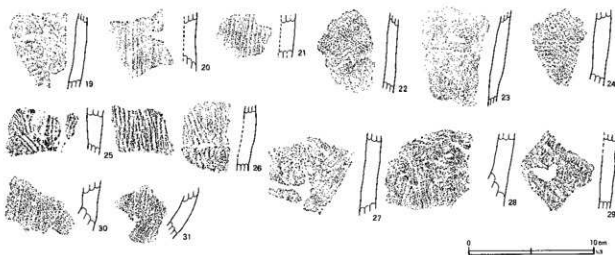


第7图 第1号炉穴出土遗物(1)

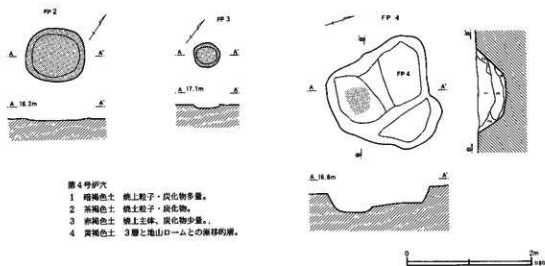
第8图 第1号炉穴出土遗物(2)



第9図 第1号炉穴出土遺物(3)



第10図 第2～4号炉穴



- 第4号炉穴
 1 暗褐色土 焼上粒子・炭化物少量。
 2 赤褐色土 焼上粒子・炭化物。
 3 赤褐色土 焼上主体、炭化物少量。
 4 黄褐色土 3層と地山ロームとの層様の層。

面北端に炉床部を持つ。規模は、長軸1.4m、短軸0.9m、深さ47cmである。主軸方位はN-18°-Eを測る。

覆土中から第13図2・3が出土した。条痕文系土器である。両者とも、胎土に繊維を含み、外面には粗く2～3本1組の条痕を斜方向に施す。

第7号炉穴(第12・13図)

Q-10グリッドに位置する。平面形は楕円形で、底面に炉床部を持つ。長軸1.4m、短軸0.7m、深さ32cmである。主軸方位はN-36°-Eを測る。

覆土中から第13図4が出土した。条痕文土器で、やや薄手の口縁部である。外面には斜方向に条痕文が見

られる。胎土に繊維を含む。

第8号炉穴(第12図)

Q-10グリッドに位置する。平面形は楕円形。覆土の状況から炉穴と思われる。長軸1.1m、短軸0.6m、深さ38cm。主軸方位はN-15°-Eを測る。

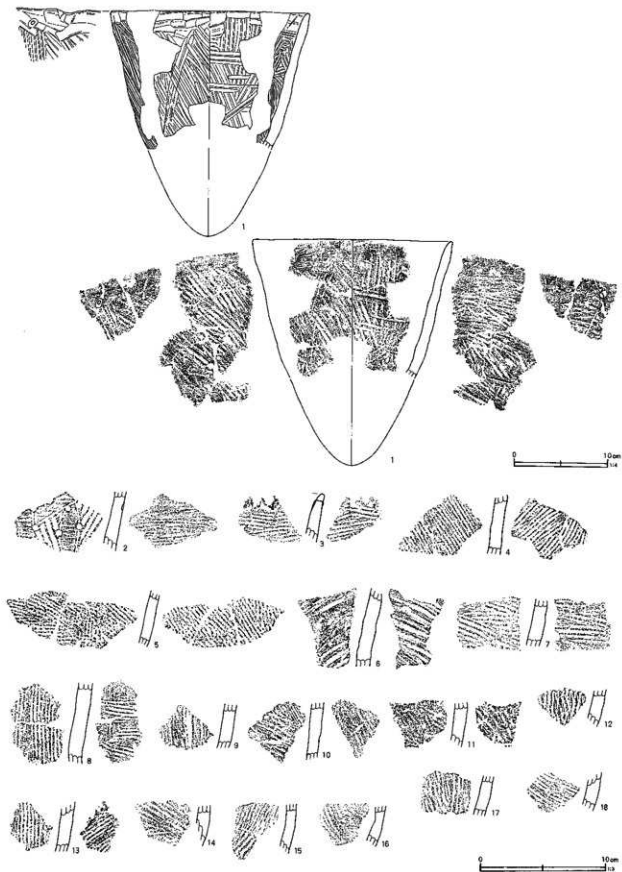
第9号炉穴(第12図)

Q・R-10グリッド。平面形は円形。直径0.8m、深さ48cm。覆土の状況から炉穴と考えられる。

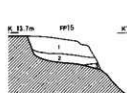
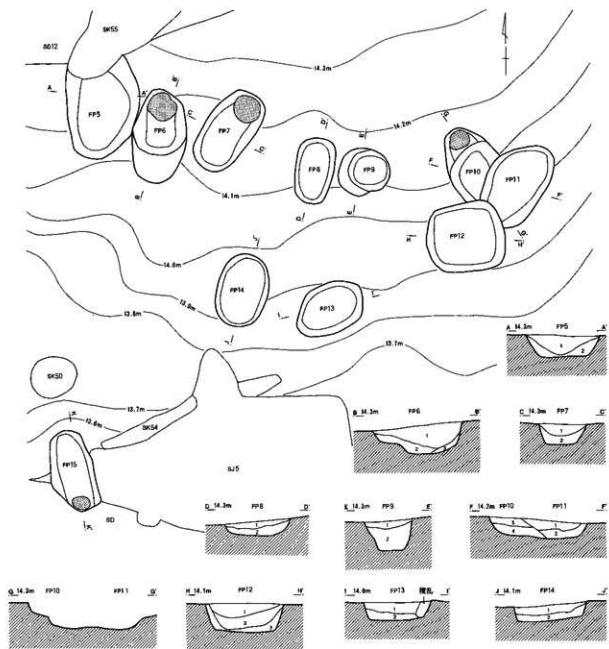
第10号炉穴(第12図)

R-10グリッド。底面に炉床を持つ。幅0.9m、深さ27cm。FP11に切られ、FP12と重複する。

第11图 第4号炉穴出土遺物



第12図 第5～15号炉穴



第5号炉穴

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量、炭化物若干。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子少量。

第6・8・13・14号炉穴

- 1 黒褐色土 ローム粒子・炭化物少量。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物少量。
- 3 暗赤褐色土 焼土ブロック、焼土粒子多量、炭化物少量。

第7号炉穴

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量、炭化物若干。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化物若干。

第9号炉穴

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量、炭化物若干。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子多量。

第10・11号炉穴

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量、炭化物若干。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子少量。
- 3 暗褐色土 1層よりやや色調が明るい。
- 4 暗黄褐色土 ローム粒子多量。

第12号炉穴

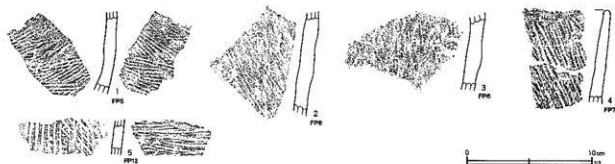
- 1 暗黄褐色土 ローム小ブロック・ローム粒子多量。
- 2 暗黄褐色土 1層よりローム小ブロック少量。
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量。

第15号炉穴

- 1 暗褐色土 焼土粒子・炭化物若干。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子少量。
- 3 暗黄褐色土 2層より焼土粒子多量。



第13図 第5～7・12号炉穴出土遺物



第11号炉穴 (第12図)

R-10グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長軸1.3m、短軸0.9m、深さ29cmである。主軸方位はN-42°-Eを測る。FP10を切り、FP12と重複する。覆土の状況から炉穴と考えられる。

第12号炉穴 (第12・13図)

R-10・11グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は、長辺1.3m、短辺1.1m、深さ46cm。FP10・11と重複する。覆土の状況から炉穴と考えられる。

覆土中から第13図5が出土した。早期の条痕文土器である。胎土に繊維を含む。

第13号炉穴 (第12図)

Q-11グリッドに位置する。平面形は楕円形。長軸1.2m、短軸0.8m、深さ28cm。主軸方位はN-56°-Eを測る。覆土の状況から炉穴と考えられる。

第14号炉穴 (第12図)

Q-11グリッドに位置する。平面形は楕円形。長軸1.2m、短軸0.8m、深さ25cmである。主軸方位はN-16°-E。覆土の状況から炉穴と考えられる。

第15号炉穴 (第12図)

Q-11グリッドに位置する。中世のSD9に切られる。底面に炉床部を持つ。幅0.7m、深さ53cmである。

(2) 土壇

第1号土壇 (第14・15図)

L-8グリッド。平面形円形。直径1.2m、深さ27cm。覆土中から第15図1が出土した。早期条痕文系の破片である。胎土に繊維を含む。

第2号土壇 (第14図)

L・M-8グリッド。平面形は楕円形。長径1.2m、短径1.0m、深さ20cm。主軸方位N-44°-W。

第3号土壇 (第14・15図)

L・M-8グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、規模は、長径1.7m、短径1.5m、深さ41cmである。主軸方位はN-43°-Eを測る。

覆土中から第15図2～6が出土した。2・5・6は早期条痕文系土器で、胎土に繊維を含む。2は口縁部で、口唇が平坦になる。3・4は縄ヶ島台式土器である。3は段を持つもので、無文襷帯の上下に文様が施文される。上部文様は、細沈線で区画し、沈線を充填するもので、同一工具による刺突文を施す。無文帯の下部には浅い刺突文が連続する。4は横沈線で区画し、斜沈線を充填する。上部に円形刺突を施す。

第4号土壇 (第14・15図)

M-8グリッドに位置する。平面形は楕円形。底面は播針状になる。長径1.1m、短径0.9m、深さ46cmである。主軸方位はN-13°-Eを測る。

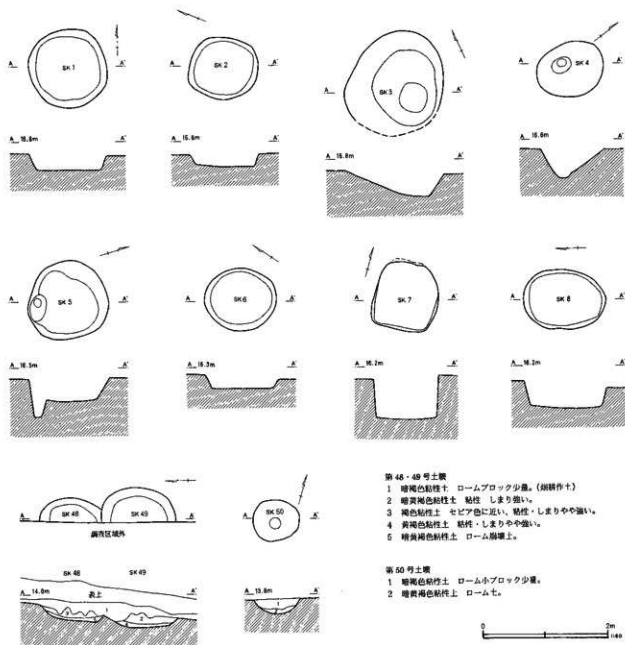
覆土中から第15図7・8が出土した。7は縄ヶ島台式で、細沈線による区画、斜沈線による充填文、刺突文が見られる。8は条痕文土器の口縁部で、口唇に刻みがつく。2片とも胎土に繊維を含む。

第5号土壇 (第14図)

M-9グリッドに位置する。平面形は円形。直径1.3m、深さ61cmである。底面には小ピットを伴う。

覆土中から第15図9～26が出土した。全て胎土に繊維を含む、早期条痕文系土器である。

第14図 土壇 (縄文時代)



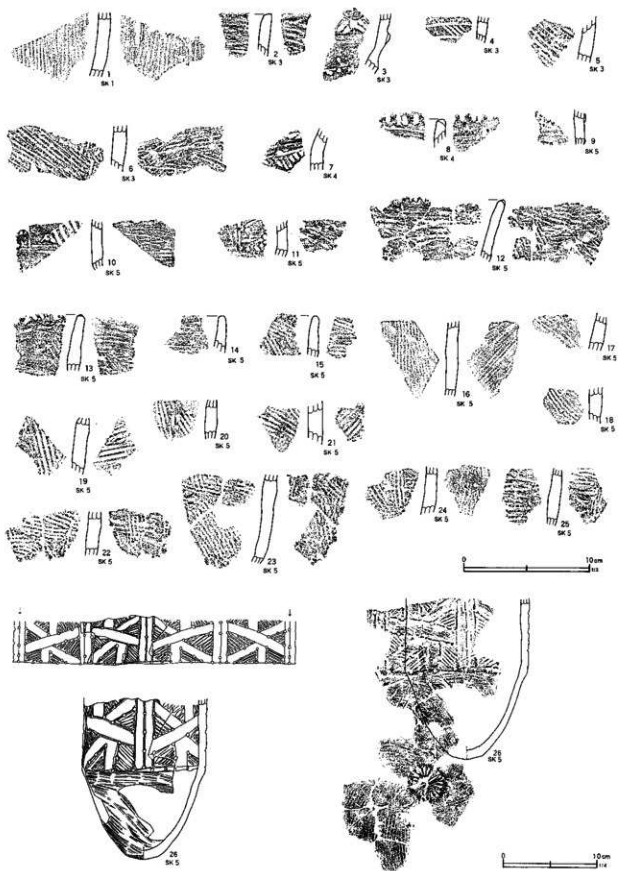
出土遺物 (第15図)

9～11・26は有文土器で、鶺鴒ヶ島台式である。9は、2本の貼り付け隆帯間が無文となる。隆帯上には刺突文が加えられる。10は、細沈線で文様を区画し、幅広の斜沈線を充填する。内面は条痕文である。11は、やや屈曲する胴部で、沈線の接続部に刺突が加えられる。

26は、今回報告する鶺鴒ヶ島台式土器で、唯一全体の

構成がわかる復元個体である。胴部文様帯から底部までの破片で、口縁部が欠損するが、さほど離れない位置に立ち上がるものと思われる。胴部文様帯部分で直に立ち上がり、文様帯下端で屈曲し、やや丸みを帯びながら底部に向かう。底部は中心部から放射状に沈線を充填する。中心部でやや丸いため、自ら安定することはなく、丸底に近い。胴部下半の屈曲部以下には、粗い条痕文が横から斜方向に加えられ、内面には条

第15图 土境（縄文時代）出土遺物



痕文の後、丁寧になでられる。

胴部上半の文様帯部分は、断面三角形の微隆線と刺突文、斜沈線の充填文によって構成される。縦の無文垂下帯によって、4単位の区割が全周する。斜方向に交差する無文帯と斜沈線の充填文が組み合わさり、縦の垂下帯を中心に、左右対象の文様を描く。微隆線上には規則的に刺突文を加え、文様帯下端の屈曲部にも等間隔に刺突が入る。刺突文、充填沈線、底部に加えられた沈線は、半載竹管状の同一施工器具を使用する。

12～25は、条痕文土器である。12・13は、外に開く口縁部で、口唇には刻みが増えられる。14・15は、立ち上がりぎみの口縁である。16～25は胴部で、内外面には密に条痕文を施す。

第6号土壙 (第14図)

N-9グリッドに位置する。平面形は楕円形。長径1.2m、短径1.0m、深さ24cm。主軸方位N-34°-W。

第7号土壙 (第14図)

N-9グリッドに位置する。平面形は方形、壁は直に落ち込み、底面が平坦になる。長辺1.1m、短辺1.0m、深さ70cm。主軸方位はN-0°-Eを測る。

第8号土壙 (第14図)

N-9・10グリッドに位置する。平面形は楕円形。長軸1.3m、短軸0.9m、深さ43cm。主軸方位N-0°-E。

第48号土壙 (第14図)

Q-11グリッドに位置する。幅1.0m、深さ32cm。

第49号土壙 (第14図)

Q-11グリッドに位置する。幅1.2m、深さ36cm。

第50号土壙 (第14図)

Q-11グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、規模は、長軸0.7m、短軸0.6m、深さ24cmである。主軸方位はN-73°-Eを測る。

(3) グリッド出土遺物 (第16・17図)

表土および遺構外の出土遺物を一括した。時間的には縄文早期の燃糸文系、田戸下層式、条痕文系、前期諸磯b式、中期加曾利E式などである。これらのうち、最も多いのが、条痕文系土器である。

第1群土器 (1～5)

早期の燃糸文系土器である。1・2は外反する口縁部で、1は縦、2は斜方向に摺りの細かい燃糸文を施す。1は口唇がやや平坦になる。3～5は胴部である。

第2群土器 (7～12)

田戸下層式である。棒状工具による沈線を施文する。12は先端が長く伸びる尖底部で、斜沈線を施文する。

第3群土器 (13～20)

野島式土器である。胎土に繊維を含み、内面には擦痕または条痕を施す。13～16は、棒状工具による沈線で文様を区画し、細沈線を充填する土器で、13・14の口唇には刻みが入る。17・18は、断面三角形の貼り付け隆線で文様区画し、斜沈線を充填する。

19・20は微隆線によって文様を描く。19は口辺部で、横隆線で口縁部文様帯の下端を区画し、縦に微隆線を接続して梯子状の文様を描く。20も同様の口辺部。

第4群土器 (6・21・22・24・25)

鶺鴒ヶ島台式土器である。胎土に繊維を含み、内面には横方向の条痕文を施す。6・21は胴部に段を持つもので、段下に無文帯を構成する。6は、段部が断面三角形に隆起し、文様は斜沈線の充填文と刺突文が組み合わさる。同一工具によると思われる。21は段の括れがやや弱い。文様は細沈線による区画と半載竹管状工具による充填沈線と刺突文の組み合わせである。22・24・25も21と同様の文様構成になる。

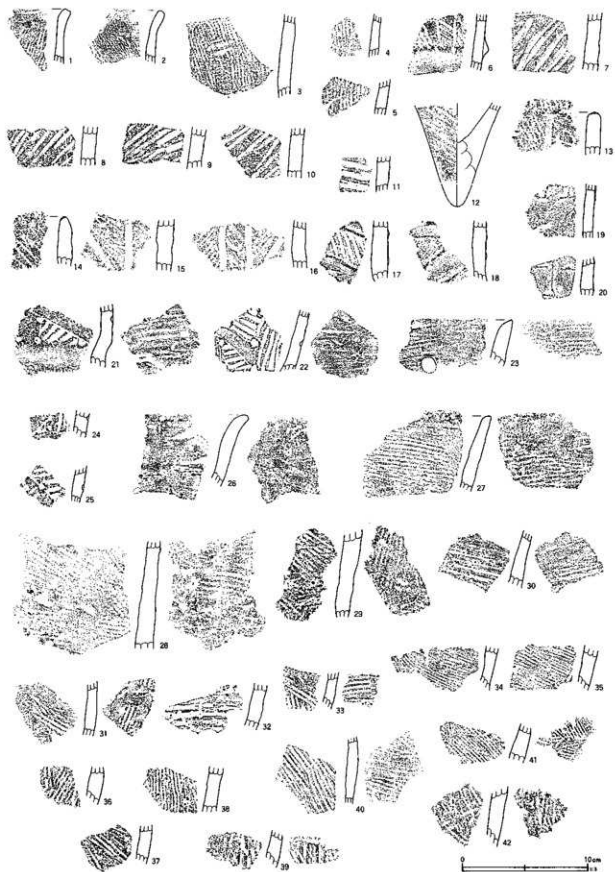
第5群土器 (23・26～50)

胎土に繊維を含み、内外面に条痕文を施文する土器を一括した。他の有文土器の出土状況から、野島式か鶺鴒ヶ島台式に所属するものと思われる。

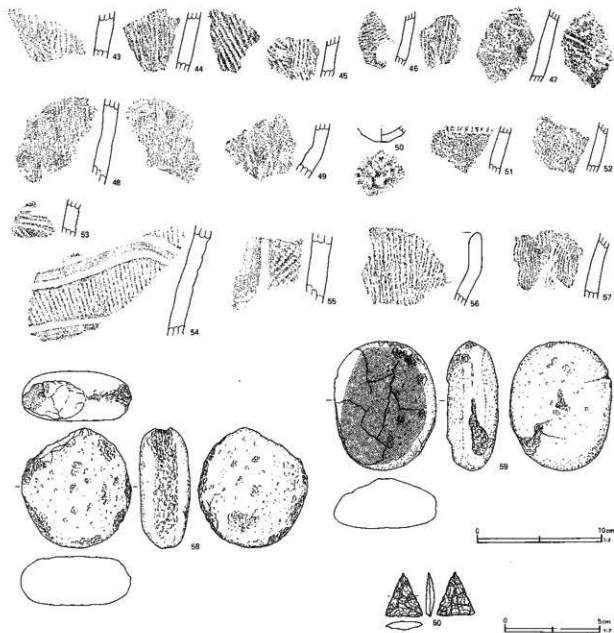
23・27は、外に開く口縁部で、23は口唇部が内削ぎ状に、27はやや平らに押圧される。23には補修孔が見られる。両者とも内外面に横方向の条痕文を施す。26は、口唇部でやや外反する。内外面とも明確な条痕は見られず、外面に横方向の擦痕を施す。

28～49は胴部である。48を除いてほとんどのものが、内外面に条痕文を施す。47の外面には、粗く浅い条痕、48は外面が擦痕状になり、内面に条痕文が見ら

第16図 グリッド出土遺物（縄文時代）（1）



第17図 グリッド出土遺物（縄文時代）（2）



れる。

50は底部である。やや薄手で丸底状になる。指押し状の成形痕が見られる。

第6群土器（51～53）

諸磯b式土器である。51は半載竹管による平行沈線内に爪形文が連続する。下部には縄文を施文する。52は縄文を施文。53は半載竹管による沈線が横走する。

第7群土器（54～57）

加曾利E式土器である。54は撚糸文地文。55はキャリパー形土器の深鉢胴部。56は撚糸文地文の口縁部。

57は集合条線が波状に垂下する。

石器（58～60）

58・59は磨石である。58は側縁が一部欠損する。欠損部には煤が付着する。長さ9.5cm、幅8.7cm、厚さ3.9cm、重さ460g。石質は多孔質安山岩である。

59は、側縁から正面にかけて欠損する。欠損後、二次的に焼成を受け、正面に煤が付着する。長さ10.2cm、幅8.1cm、厚さ4.1cm、重さ500g。石質は閃緑岩。

60は石鎌である。長さ2.3cm、幅2.0cm、厚さ0.45cm、重さ1.37gである。石質はチャートである。

2. 古墳時代前期

第1号住居跡 (第18図)

F-5グリッドに位置する。北部が大きく攪乱される。北西方向に主軸とする隅丸方形プランの住居跡であり、主軸方位はN-48°-Wを測る。遺構の規模は、長辺4.7m、短辺4.3m、深さ32cmを測る。

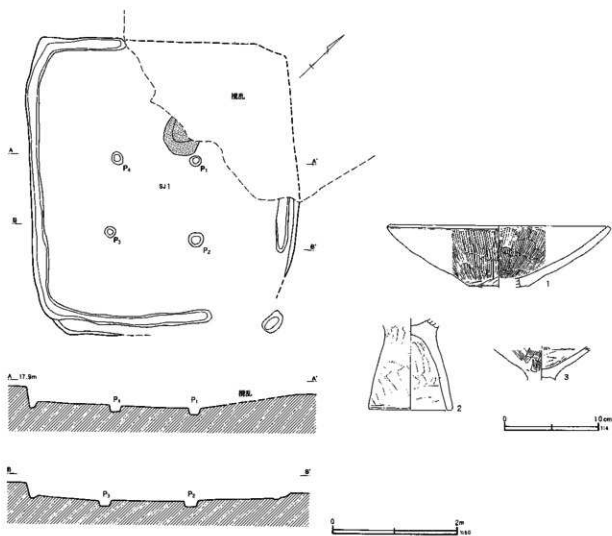
壁溝は東隅部で途切れるが、本来はほぼ全周していたものと思われる。床面は中央部に向かってやや低くな

る。炉跡は一部攪乱を受けるものの、中央からやや北よりに検出された。

住居跡に伴うと考えられるピットは5基検出された。このうち、主柱穴に相当するものはP₁~P₄である。ピットの深さはP₁=10cm、P₂=11cm、P₃=9cm、P₄=10cmを測る。

覆土中から第18図1~3が出土した。

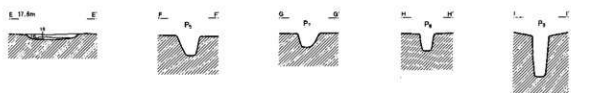
第18図 第1号住居跡・出土遺物



第1号住居跡出土遺物観察表 (第18図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	高坏	(24.0)			白砂	黄褐	A	15	
2	台付甕			8.7	白片	黄褐	B	40	
3	台付甕				白砂	黒褐	A	80	

第20図 第2号住居跡(2)

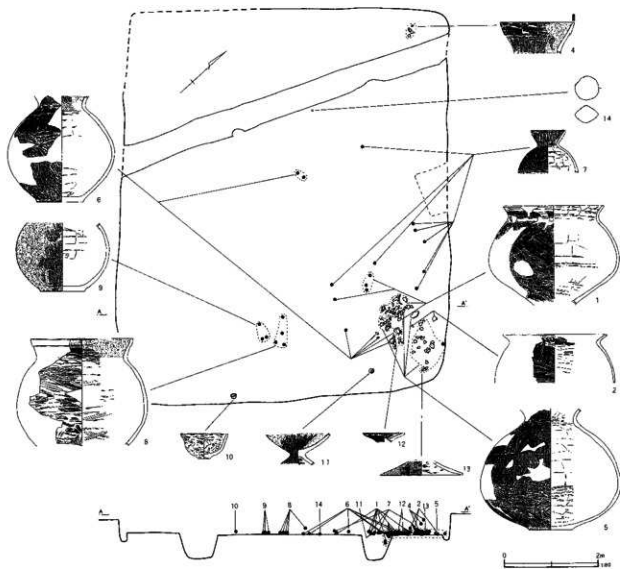


第2号住居跡

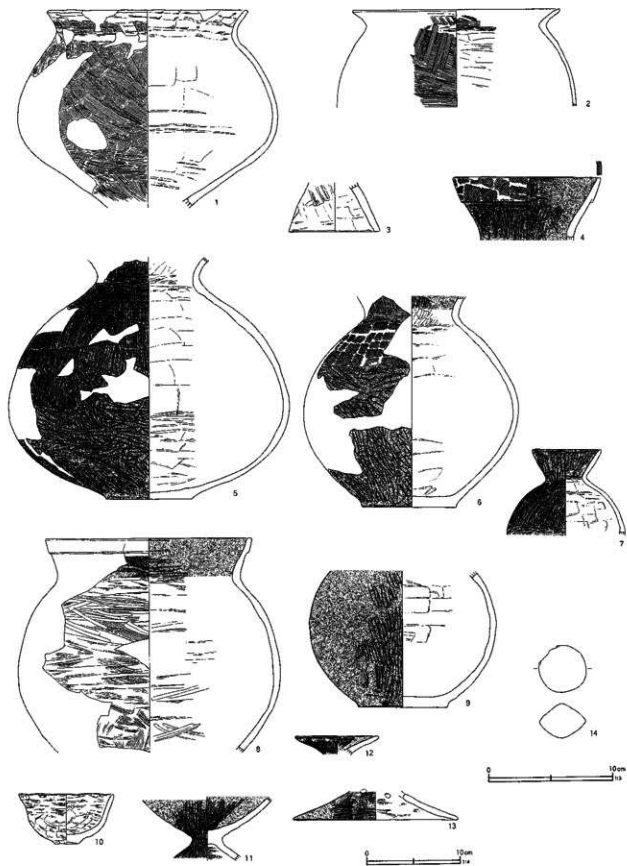
- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色土 炭化物、焼土わずか。 | 10 褐色土 ローム粒子少量、焼土粒わずか。 |
| 2 黒褐色土 炭化物・焼土含まず。 | 11 黒色土 炭化物。 |
| 3 黒褐色土 炭化物。(柱痕) | 12 黒色土 ロームブロック。 |
| 4 黄褐色土 ロームめじた土、炭化物含まず。 | 13 黄褐色土 ローム粒子多量。 |
| 5 黒褐色土 炭化物。 | 14 赤褐色土 炭化物、焼土粒子多量。 |
| 6 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量。 | 15 黒色土 炭化物。 |
| 7 黒色土 ロームブロック少量。 | 16 赤褐色土 焼土粒子・ローム粒子多量。 |
| 8 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量。 | 17 黄褐色土 炭化物、ローム粒子多量。 |
| 9 黒褐色土 粘性・しまり少ない。 | 18 赤色土 焼熟ローム。 |



第21図 第2号住居跡遺物分布図



第22図 第2号住居跡出土遺物



第2号住居跡出土遺物観察表(第22図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	台付甕	(21.5)			白砂	黒褐	A	50	
2	台付甕	(22.2)			白片砂	赤褐	A	20	
3	台付甕			9.7	片砂	黄褐	A	80	
4	壺	(16.0)			片黒砂	黄褐	A	30	赤彩
5	壺			9.3	白砂	赤褐	A	65	表面赤彩
6	壺			9.9	黒片	黄褐	A	50	赤彩
7	壺	7.4			黒白砂	黄褐	A	80	赤彩
8	甕	(22.0)			白砂石	黄褐	A	20	赤彩
9	壺			(9.5)	赤砂	明黄褐	A	15	赤彩
10	小型坏	10.2	5.3	2.5	白砂	黄褐	B	100	
11	高坏				黒砂	暗褐	A	70	赤彩
12	器台	(8.9)			白砂	淡黄	A	70	赤彩
13	器台			(17.6)	砂	淡黄	A	50	赤彩
14	土玉	径3.7cm、厚さ2.7cm、重さ22.5g			白	赤褐	C	95	

出土遺物(第18図)

1は高坏の体部破片である。内外面とも縦方向に蜜に磨きされる。2は台付甕の脚台部である。内外面とも木口ナデされる。3も台付甕の底部で、外面にはハケメが見られる。

第2号住居跡(第19～21図)

E・F-4・5グリッドに位置する。中・近世の遺構であるSD2・3に切られ、西隅部と北壁中央部に擾乱を受ける。北西方向に主軸をとる方形プランの住居跡である。主軸方位はN-50°-Wを測る。遺構の規模は、長辺8.4m、短辺7.0m、深さ40cmを測る。

壁溝は全周していたものと思われる。余暇面はほぼ平坦になる。券跡は中央からやや北西壁よりに位置し、長径1.0m、短径0.8m、深さ8cmを測る。

ピットは9基検出された。このうちP₁～P₄が主柱穴と考えられる。P₅は南東壁の壁溝に接して位置し、周囲がやや高く盛り上がる。貯蔵穴と考えられる。ピットの深さはP₁=46cm、P₂=42cm、P₃=56cm、P₄=54cm、P₅=31cm、P₆=72cm、P₇=23cm、P₈=28cm、P₉=65cmを測る。

出土遺物は、西隅部からP₁と壁の間にかけて床面上に密集した状態で、第22図1・2・5・6・11～13が出土した。その他、北隅部の床面で4が、南東壁に接して10が、P₁内から3が出土した。他の遺物も床面

上から覆土下層にかけての出土である。

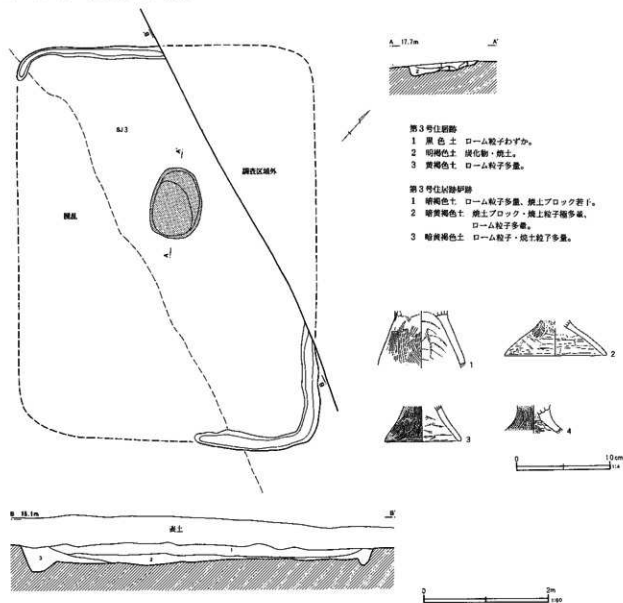
出土遺物(第22図)

1～3は台付甕である。1は頸部が緩やかに括れ、口唇部が平坦に面取りされる。外面にはハケメ、内面には木口ナデされる。胴下部の接合部分には繰り返し、横方向にハケメを加えている。口縁部にはハケメ後に上半部のみ横ナデされる。2は頸部が屈曲して開く器形で、口縁部内面から外面にはハケメ、体部内面は木口ナデされる。3は脚台部で、外面は丁寧になでられる。

4～7・9は壺である。4は口縁部を帯状に薄く折り返して縄文帯を作り出すもので、口唇部から帯状部にかけて、熱りの細かい単節LRを充填する。頸部と内面は縦方向に磨きされ、赤彩される。5は胴部が膨らみ、下部で最大径になる。外面は密に磨きされる。6は胴部部に縄文帯を配するもので、熱りの細かい単節LRを4段に施文する。頸部と胴部、頸部内面は密に磨きされ、赤彩される。7は小型の壺である。胴下部を輪積の接合部で欠損する。頸部が屈曲して直線的に開く器形である。外面から口縁内面にかけては丁寧な磨きされ、赤彩される。9は胴部から底部にかけての大型破片。球状に膨らむ体部が特徴的な器形である。外面は縦方向に磨き、赤彩される。

8は甕形土器で、口縁から胴部にかけての破片。脚

第23図 第3号住居跡・出土遺物



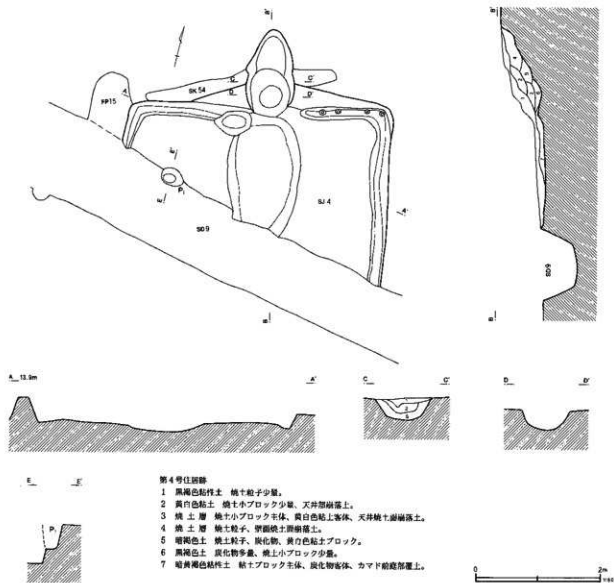
第3号住居跡出土遺物観察表 (第23図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	出土位置・備考
1	台付甕				白砂	褐	A	20	
2	高坏			(10.8)	砂	黄褐	A	20	
3	器台			(8.2)	白砂	暗褐	A	20	
4	器台				砂	明褐	A	70	

台部が付くかどうかは不明。頸部がゆるく立ち上がり、口縁部で折り返して帯状になる。外面はハケメ後、粗い磨きか横方向に加えられる。内面は横方向の木口ナデである。頸部外面と口縁内面が赤彩される。

10は小型の坏。内外面は粗いナデに加えられる。
11は高坏の体部である。内外面ともに縦方向に磨きされ、赤彩される。
12・13は器台である。12は器受部の破片。丁寧に磨

第24図 第4号住居跡



第4号住居跡

- 1 黒褐色粘性土 焼土粒子少量。
- 2 黄白色粘土 焼土小ブロック少量、天井部崩落上。
- 3 焼土層 焼土小ブロック主体、黄白色粘土客体、天井焼土崩落区。
- 4 焼土層 焼土粒子、穿面焼土崩落区。
- 5 暗褐色土 焼土粒子、炭化物、黄白色粘土ブロック。
- 6 黒褐色土 炭化物多量、焼土小ブロック少量。
- 7 暗黄褐色粘性土 焼土ブロック主体、炭化物客体、カマド前庭部遺上。

磨きされる。13は端部が反って開く脚部。円孔が穿たれる。外面は丁寧に磨きされる。14は土玉である。

第3号住居跡 (第23図)

C-2・3グリッドに位置する。南部に大きく攪乱を受け、北部は調査区域外に及ぶ。壁溝のプランから全容を推定できる。北西方向に主軸をとる長方形プランの住居跡である。主軸方位はN-43°-Wを測る。遺構の規模は、推定長辺6.4m、推定短辺4.8m、深さ36cmを測る。

床面はほぼ平坦。壁溝が巡る。炉跡は中央からやや

ずれた位置に検出された。長径113cm、短径81cm、深さ14cmを測る。覆土中から第23図1~4が出土した。

出土遺物 (第23図)

1は台付臺の脚部である。外面ハケメ調整。2は高坏の脚部である。基部近くは磨き、端部から中位にかけてはなでられる。3・4は器台の破片である。3は径の小さい脚部で、外面は磨き、赤彩される。4は脚部で、底部からの穿孔が見られる。外面磨き、赤彩される。

3. 平安時代

第4号住居跡 (第24図)

Q-11グリッドに位置する。南側半分を中世の遺構であるSD9に切られる。SK54・FPI5を切って構築される。北北西方向に主軸をとる方形プランの住居跡であり、主軸方位はN-14°-Wを測る。

遺構の規模は、一辺4.3m、深さ28cmを測る。北壁中央部にカマドが設けられる。カマドの主体部は皿状に落ち込む。カマドの覆土には、焼土層と黄白色粘土層が顕著に見られ、天井部の崩落土が遺存していることがわかる。壁溝はカマドの両側部分まで巡る。床面はほぼ平坦で、カマド前庭部から床面中央にかけて、長楕円形の掘り方が認められた。柱穴に相当するピットは、P₁の1基のみ検出された。

出土遺物は第25図1・5がカマド内から、2・3が

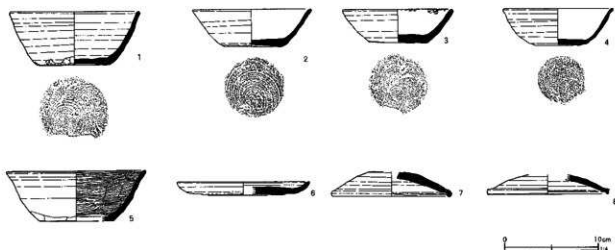
北壁西側よりの床面から、4がカマド前庭部やや東側の床面上から、他は覆土中からの出土である。出土遺物から見て、9世紀後半の住居跡であると考えられる。

出土遺物 (第25図)

出土遺物で実測可能なものは、坏5点、皿1点、蓋2点の計8点である。1・3・5は酸化焼成に近いもので、他は全て還元焼成された須恵器である。

1は深身の坏である。底部を回転糸切り離し後に体部下部に窪みによる調整痕が見られる。2・3はやや浅身の坏で、4は口唇がやや外反する。5は内面が黒色処理され、ミガキがなされる。底部外面から体部下部にかけて艶削りされる。6は内面が滑らかで、硯に転用されたものか。7・8は須恵器蓋の破片である。

第25図 第4号住居跡出土遺物



第4号住居跡出土遺物観察表 (第25図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成残存率	出土位置・備考
1	坏	13.7	5.6	7.4	赤片	橙	A 70	カマド 底部回転糸切り痕
2	須恵器坏	12.8	4.9	6.0	片	灰	A 85	床面 底部回転糸切り痕
3	坏	11.5	3.4	6.1	片	にぶい黄橙	A 95	床面 口唇部タール付着、底部回転糸切り痕
4	須恵器坏	11.7	3.9	4.2	片	灰黄	B 95	カマド前庭部床面 底部回転糸切り痕
5	坏	(15.0)	5.3	(8.0)	赤	にぶい橙	A 25	カマド 内黒
6	須恵器皿	(13.0)	1.3	(7.5)	白砂	黄灰	A 20	転用硯?
7	須恵器蓋	(12.5)	2.5		白片	灰黄	A 30	
8	須恵器蓋	13.0	2.0		石片	灰	A 10	

4. 中・近世

(1) 井戸跡

第1号井戸跡 (第26・27図)

I・J-6グリッドに位置する。平面形は円形であり、長軸4.4m、短軸4.0m、深さ390cmである。

覆土中から第27図1-5が出土した。1は古瀬戸の灰釉盤の体部から底部にかけてである。15世紀後半のものと思われる。2はかわらけで、底部に回転糸切り痕が見られる。1と同時期のものであろう。3は焙烙で、16世紀前半のものと思われる。4は13世紀代の常清産の葉破片である。5は砂岩製の磁石である。

(2) 地下式墳・地下室

第1号地下式墳 (第28・37図)

F・G-4グリッドに位置する。規模は、玄室底面の幅4.1m、奥行2.2m、深さ2.2mである。入口部幅は1.9m、玄室から入口部までの距離は1.5mであり、入口部底面までの深さは1.9mを測り、入口部からは、やや段差を経て玄室底面に至る。

覆土中から第37図7が出土した。人為的に弧状に作り出されたもので、表裏は平坦になる。用途不明の石製品である。弧状になった内側の表裏面は被熱赤変し、側面には煤が付着している。絹雲母片岩製である。

第2号地下式墳 (第29・37図)

L・M-8・9グリッドに位置する。規模は、玄室底面の幅2.5m、奥行1.6m、深さ2.3mである。入口部幅は2.1m、玄室から入口部までの距離は1.7mであり、入口部底面までの深さは1.3mを測る。天井部が崩落して、底面が広く残る。

覆土中から第37図1・6が出土した。1は古瀬戸の天目茶碗の破片である。16世紀代のものと思われる。第1号地下室から出土した破片とも接合した。6は常清産の壺の破片である。16世紀代のものと思われる。

第3号地下式墳 (第30・37図)

R-9グリッドに位置する。規模は、玄室底面の幅2.0m、奥行1.4m、深さ1.8mである。入口部幅は1.3m、玄室から入口部までの距離は1.1mであり、入口部底面までの深さは1.1mを測る。

覆土中から第37図5が出土した。5は輸入青磁の合子蓋で、中国産のものと思われる。一部剥落した部分があるが、ほぼ完形である。平面は円形を呈し、端部には返しがつく。表面には6枚の花弁が二重に開き、外側の花弁の上には数個の小突起で模様を描く。表面に薄い薄空色の青磁釉が施される。15世紀代のものと思われる。

第4号地下式墳 (第31図)

R-9・10グリッドに位置する。SD8に切られ、東側に攪乱を受ける。幅1.8m、深さ1.6mである。

第5号地下式墳 (第32図)

R・S-11グリッドに位置する。規模は、長さ4.4m、幅3.4m、深さ1.6mである。ピットが2基伴う。

第6号地下式墳 (第33・37図)

P-11グリッドに位置する。規模は、長さ3.8m、幅2.3m、深さ1.7m、である。覆土中から第37図2・3が出土した。2点とも青磁碗の底部である。15世紀代のものと思われる。

第1号地下室 (第34・37図)

O-9グリッドに位置する。規模は、主体部底面の幅2.5m、奥行1.7m、深さ1.8mである。入口部幅は1.2m、玄室から入口部までの距離は1.2mであり、入口部底面までの深さは70cmを測る。玄室内には深さ60cmの方形土壌が伴う。

覆土中から第37図1・4が出土した。1はSX1から出土した破片と接合した。4は瀬戸・美濃系の志野皿の底部である。17世紀のものである。

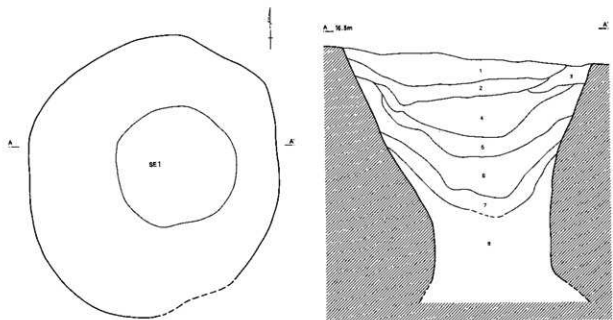
第2号地下室 (第35図)

O-8グリッドに位置する。主体部底面の幅2.5m、奥行2.4m、深さ2.7mである。入口部幅は1.1m、玄室から入口部までの距離は0.7m、入口部底面までの深さは1.4mを測る。入口と主体部との段差は大きい。主体部には深さ30cmの方形土壌が2基伴う。

第3号地下室 (第36図)

O-7グリッドに位置する。規模は、幅3.1m、深さ1.0mである。

第26図 第1号井戸跡

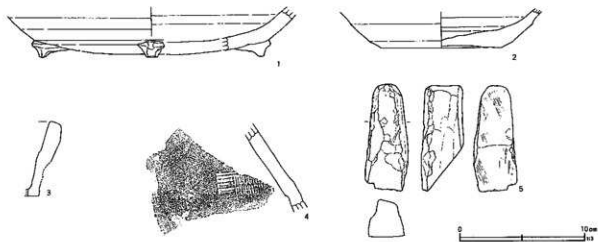


第1号井戸跡

- | | | | |
|--------|--------------------|--------|--------------------|
| 1 暗褐色土 | ロームブロック少量。 | 5 暗褐色土 | ロームブロック若干、ローム粒子多量。 |
| 2 暗褐色土 | ロームブロック少量、ローム粒子若干。 | 6 暗褐色土 | ロームブロック多量、ローム粒子若干。 |
| 3 暗褐色土 | ロームブロック少量、ローム粒子多量。 | 7 黒色土 | ロームブロック多量。 |
| 4 暗褐色土 | ロームブロック少量、ローム粒子多量。 | 8 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒子多量。 |



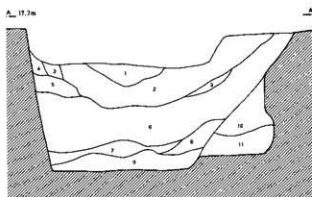
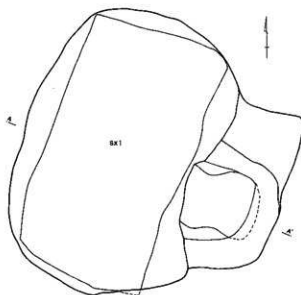
第27図 第1号井戸跡出土遺物



第1号井戸跡出土遺物観察表 (第27図)

番号	材質	産地	器種	口径	器高	底径	装飾	胎土色・色調	残存率	出土位置・備考
1	陶器	古瀬戸	灰釉鉢			(18.0)		灰褐	20	底部回転糸切り痕
2	土器		かわらけ			(9.7)		黒褐	20	
3	土器		焙烙	(38.0)	5.9	(34.6)		黒		
4	陶器	常滑	甕					灰		
5	石製品		砥石	長さ8.3cm、幅3.3cm、厚さ3.0cm、重さ105g、砂岩製						

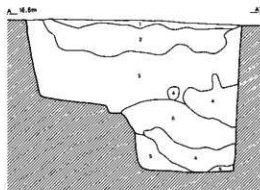
第28図 第1号地下式墳



第1号地下式墳

- 1 黄褐色土 ローム粒子少量。
- 2 黄褐色土 ローム粒子多量。
- 3 黒色土 ローム粒子若干。
- 4 黄褐色土 崩落ロームブロック。
- 5 黒色土 ロームブロック。
- 6 黒色土 崩落ロームブロック多量。
- 7 黒色土 ロームブロック・炭化動物少量。
- 8 黒色土 6層に依る。
- 9 暗茶褐色土 ロームブロック。
- 10 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量。
- 11 黒色土 ロームブロック・ローム粒子若干。

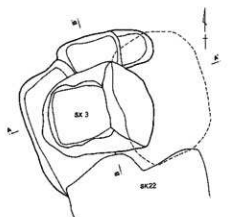
第29図 第2号地下式墳



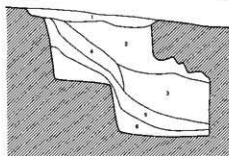
第2号地下式墳

- 1 暗褐色土 暗褐色粒子少量。
- 2 黒褐色土 暗褐色粒子少量。
- 3 黒黄褐色土 2層を基本に地山ローム粒子少量。
- 4 黄褐色土 ローム大ブロック上体、天井部崩落土に3・5層黑土混入。
- 5 黒褐色土 炭化物、3層に近い。
- 6 暗茶褐色土 5層基本にローム大ブロック多量。

第30図 第3号地下式墳



A_ 14.7m

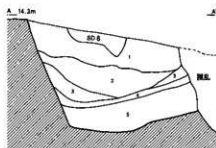
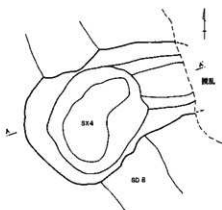


第3号地下式墓

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量、粘土粒子わずか。
- 2 褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量。
- 3 褐色土 ローム大ブロック多量。
- 4 暗褐色土 ローム粒子少量。
- 5 暗黄褐色土 ローム粒子少量。
- 6 暗褐色土 ローム小ブロック少量。



第31図 第4号地下式墳

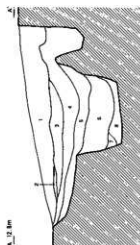
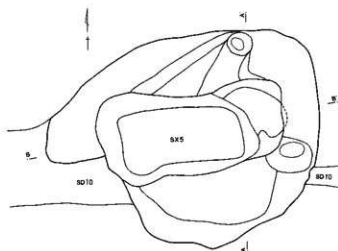


第4号地下式墓

- 1 褐色土 ローム粒子少量。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・黒色土ブロック多量。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック少量。
- 4 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量。
- 5 黄褐色土 ロームブロック。



第32図 第5号地下式墳

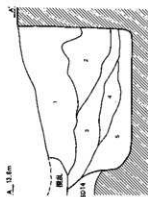
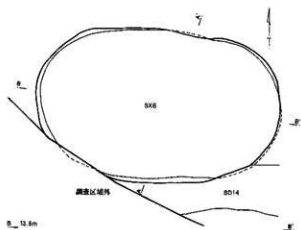


第5号地下式墓

- 1 暗茶褐色土 ロームブロック・粘土粒子・炭化物少量。
- 2 黒褐色土 炭化物(竹など)少量。
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量。
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量。
- 5 暗褐色土 ロームブロック若干。
- 6 暗黄褐色土 ロームブロック多量。
- 7 暗褐色土 ローム小ブロック若干。
- 8 黄褐色土 ロームブロック多量。



第33図 第6号地下式墳

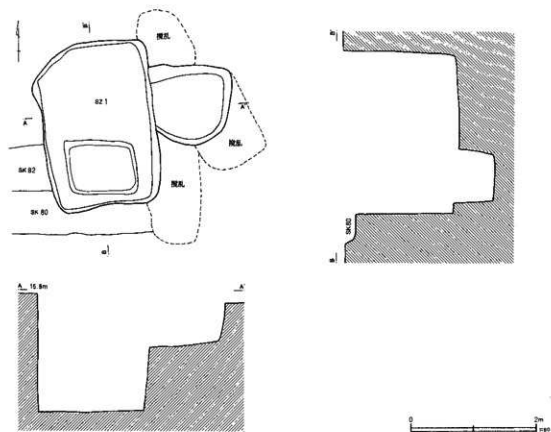


第6号地下式墓

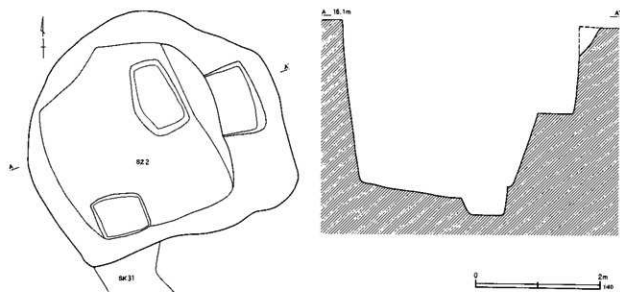
- 1 暗灰茶褐色土 ローム小ブロック多量、黄色土ブロック少量。
- 2 黄褐色粘土 天井層壁のハードローム上半体、新目に暗灰茶褐色土。
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量。
- 4 黄褐色粘土 天井層壁のハードローム土。
- 5 茶褐色土 ローム小ブロック少量。



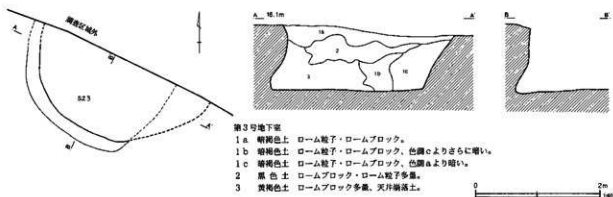
第34图 第1号地下室



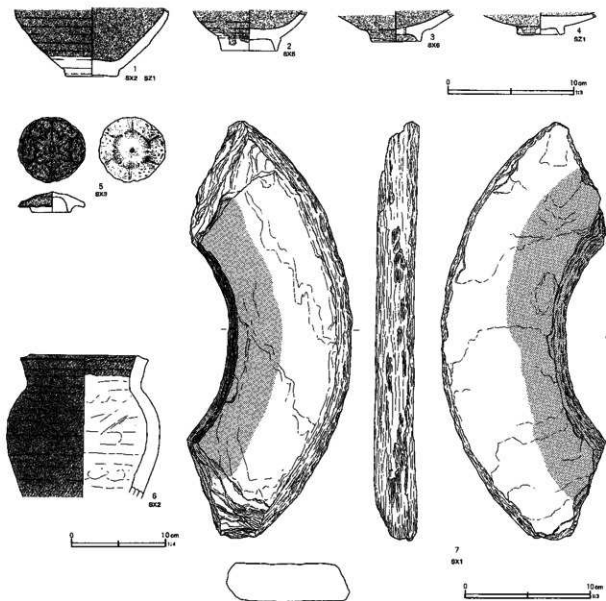
第35图 第2号地下室



第36図 第3号地下室



第37図 地下式墳・地下室出土遺物



地下式墳・地下室出土遺物観察表 (第37図)

番号	材質	産地	器種	口径	器高	底径	装飾	胎土色・色調	残存率	出土位置・備考
1	陶器	古瀬戸	天目茶碗			4.1	鉄軸	浅黄	30	SX2・SZ1
2	青磁		碗			4.5	青磁軸	灰白	70	SX6
3	青磁		碗			4.0	青磁軸	灰白	10	SX6
4	陶器	瀬戸・美濃	志野皿			3.8	無色軸	淡黄	80	SZ1
5	青磁	中国	合子壺	3.2	1.5	体径5.3	青磁軸	灰白	100	SX3
6	陶器	常滑	壺	13.7				灰	30	SX2
7	石製品			長さ33.0cm、幅9cm、厚さ3.0cm、重さ1970g、縞雲母片岩製						SX1 用途不明

(3) 土壌 (第4・38~43・46図)

今回検出された土壌の中で、出土遺物と覆土の状態から縄文時代と判断された土壌以外ものは81基を数える。

調査区東部に分布が偏り、その中でもSD9・15・19に囲まれる区域に集中するようである。平面形態は、長方形、方形、楕円形と多様であるが、長方形のものは主軸を南北にとるものと、東西にとるものの二種にわかれる。覆土はほとんどのものがしまりの弱い黒色土または黄褐色土である。

出土遺物のないものがほとんどで、明確な時期は判断できないが、形態と覆土の状況から、ほとんどの土壌が近世以降のものと思われる。

なお、調査区内での土壌の位置については、第4図の調査区全体図および第46図を、個別の土壌の形態や計測値については中・近世土壌一覧表を参照されたい。

出土遺物 (第44図)

1は近世の染付茶碗の破片である。外面に草花文を描くものである。第18号土壌出土。

2は青磁碗である。底面の内面に透かし模様が見られる。14世紀前半のものか。第12号土壌出土。

3は指鉢である。15世紀後半から16世紀にかけてのものと思われる。第39号土壌出土。

(4) 溝

溝は26条検出された。これらのうち、遺構の時期を推定できるものは、SD1とSD9である。SD1は周辺の地山削平後に構築され、江戸時代の溝と考えられる。よって調査区中央の削平部も、江戸時代の開発と考えられる。SD9は中世の屋敷堀と考えられる。

SD10・11も時期は不明だが、屋敷堀だった可能性がある。この他、SD15・17~19・21・24~26は調査以前の民家の区画と重なるため、近世以降の区画溝と思われる。

第1号溝 (第45・47図)

H-5グリッドからI-5グリッドにかけて位置する。削平部に構築され、東西方向には直線的に伸びる溝である。全長15.7m、幅0.7m、深さ8cmを測る。

覆土中から第47図1・4が出土した。1は近世の鉄軸碗である。4は古銭で、寛永通寶である。出土遺物から判断して、江戸時代に構築された溝と考えられる。

第2号溝 (第45・47図)

E-4グリッドからE-5グリッドにかけて位置する。古墳時代前期のS J 2を切って、北東-南西方向にまっすぐ伸びる。全長17.8m、幅0.7m、深さ52cmを測る。覆土中から第47図5が出土。瓦質土器で、風炉または火鉢の胴部破片である。15~16世紀代のものと思われる。

第3号溝 (第45図)

E-4グリッドに位置する。S J 2を一部切る。全長4.8m、幅1.3m、深さ45cmを測る。

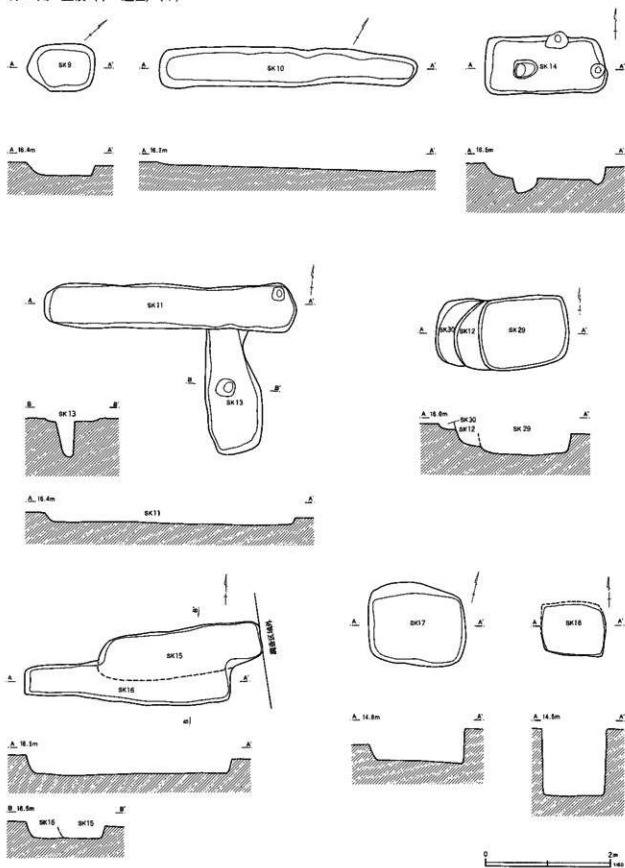
第4号溝 (第45図)

D-4グリッドからC-5グリッドにかけて位置する。削平部に構築される。全長7.2m、幅1.8m、深さ58cmを測る。

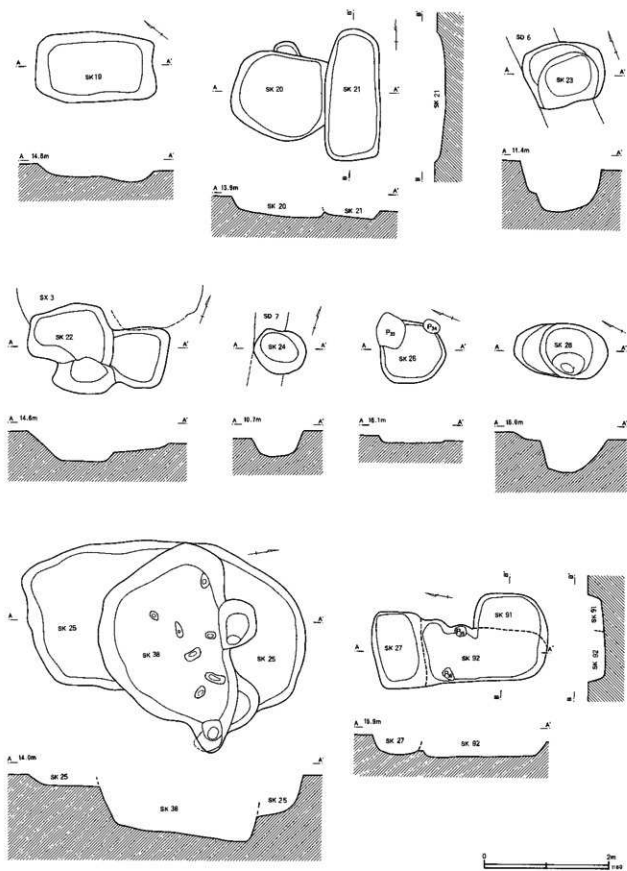
第5号溝 (第45図)

L-6グリッドからK-8グリッドにかけて位置する。北東-南西方向にまっすぐに伸びる。全長21.8m、幅0.9m、深さ18cmを測る。

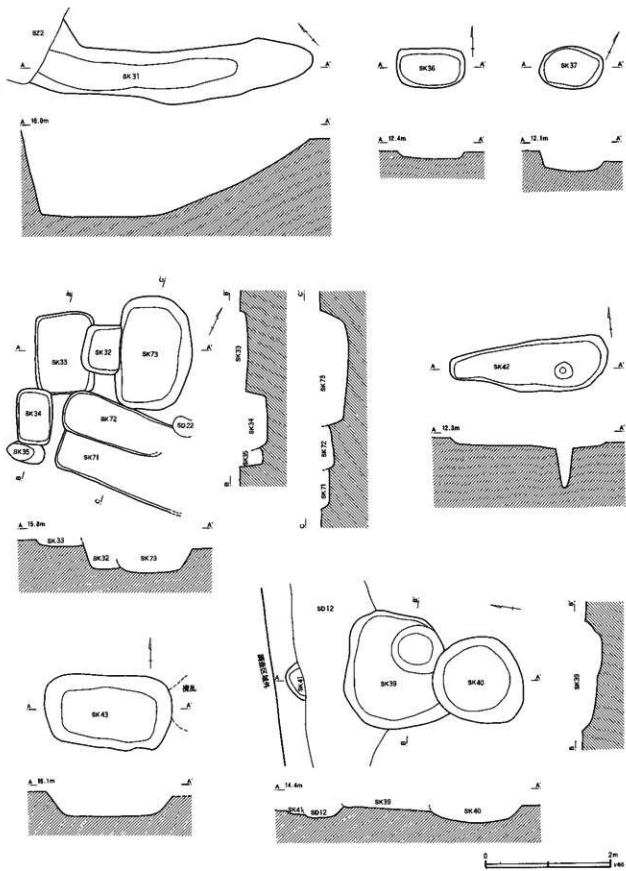
第38图 土壤(中·近世)(1)



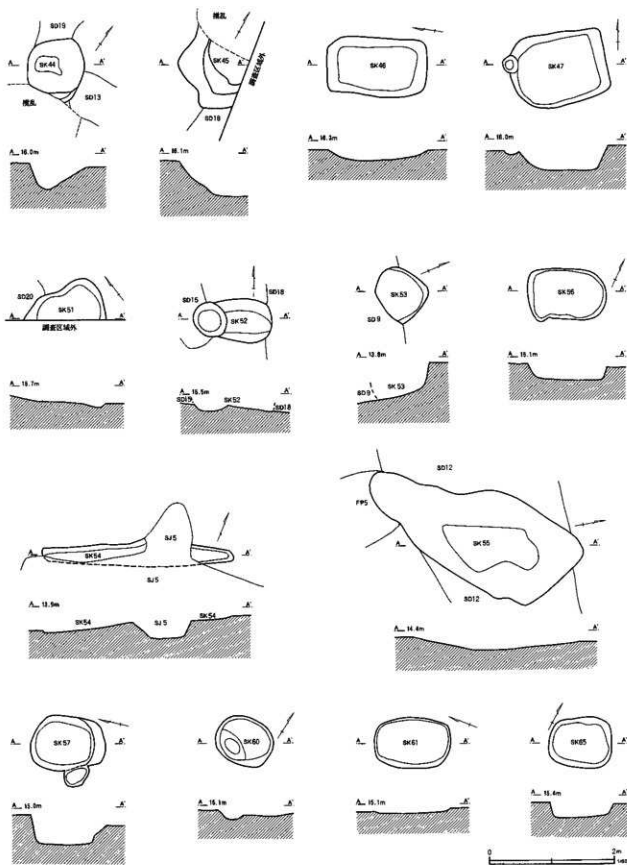
第39図 土壘（中・近世）（2）



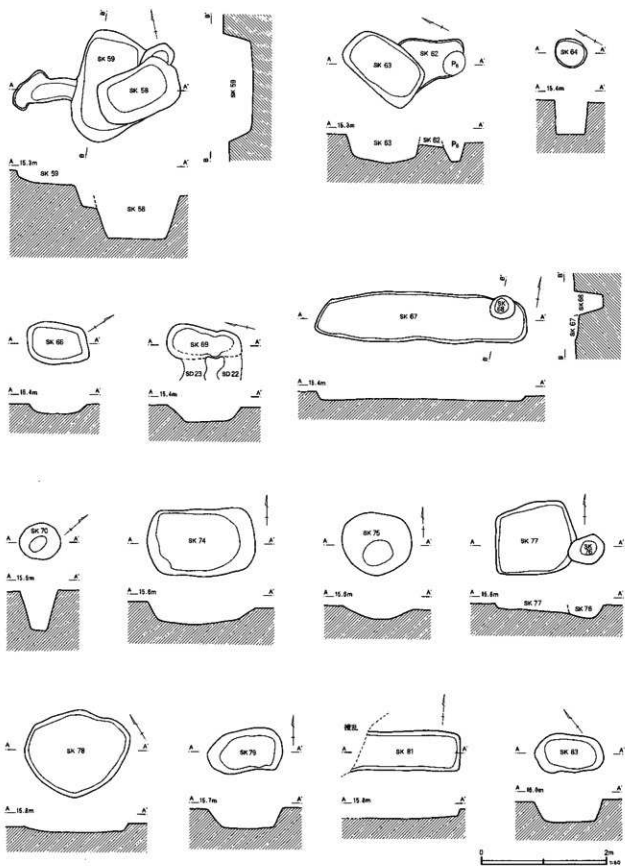
第40図 土壇 (中・近世) (3)



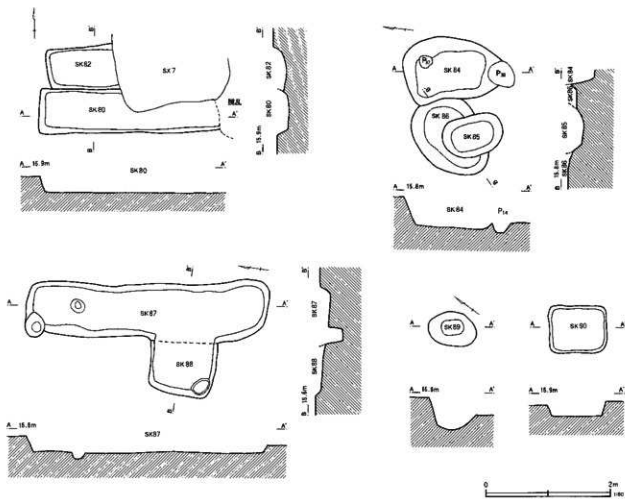
第41图 土壤(中·近世)(4)



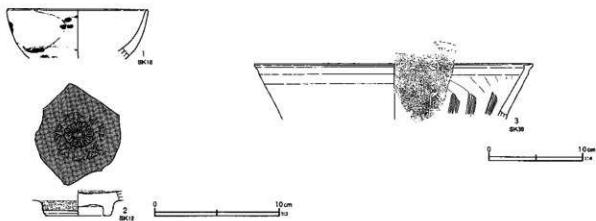
第42图 土壤(中·近世)(5)



第43図 土壇 (中・近世) (6)



第44図 土壇 (中・近世) 出土遺物



土壇 (中・近世) 出土遺物観察表 (第44図)

番号	材質	産地	器種	口径	器高	底径	裝飾	胎土色・色調	残存率	出土位置・備考
1	磁器	肥前	碗	(11.2)			染付	白	10	SK18 草花文
2	青磁		碗		5.1		青磁軸	灰	95	SK12 底部内部にすかし絵
3	瓦器	在地	播鉢	(29.7)				灰褐色	5	SD12・SK39

中・近世土壌一覽表

遺構名	グリッド	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	主軸方位	挿入番号
SK 9	M-7	長方形	1.1	0.7	21	N-42°-E	第38図
SK10	M-7	長方形	4.1	0.6	15	N-63°-E	第38図
SK11	M・N-7	長方形	4.3	0.7	11	N-89°-E	第38図
SK12	O-8				34		第38図
SK13	N-7			幅0.9	62	N-12°-W	第38図
SK14	N-7	長方形	1.9	0.9	49	N-88°-W	第38図
SK15	N-7	長方形	2.6	0.7	28	N-80°-E	第38図
SK16	M・N-7・8	長方形	3.3	0.6	33	N-85°-E	第38図
SK17	Q・R-10	長方形	1.5	1.3	55	N-77°-E	第38図
SK18	Q-10	長方形	1.0	0.9	160	N-87°-W	第38図
SK19	R-10	長方形	1.9	1.1	31	N-37°-W	第39図
SK20	Q-9		1.5	1.4	34	N-89°-W	第39図
SK21	Q-9	長方形	2.1	0.9	35	N-1°-E	第39図
SK22	R-9・10		2.2	1.4	49	N-82°-E	第39図
SK23	T-12	方形	1.3	1.0	80	N-70°-W	第39図
SK24	S-12	楕円形	0.8	0.7	42	N-71°-E	第39図
SK25	Q-9	長方形	4.7	2.4	68	N-24°-E	第39図
SK26	O-8	円形	1.0	-	12	-	第39図
SK27	O-8	長方形	1.2	0.8	31	N-69°-E	第39図
SK28	O-8・9	楕円形	1.5	0.9	64	N-29°-W	第39図
SK29	O-8	長方形	1.4	1.2	52	N-86°-E	第38図
SK30	O-8				10		第38図
SK31	O-8			幅0.8	140	N-50°-W	第40図
SK32	P-9	長方形		0.8	40	N-61°-E	第40図
SK33	O・P-9	長方形	1.3	9.4	9	N-25°-W	第40図
SK34	O・P-9	長方形	0.9	0.6	45	N-25°-W	第40図
SK35	O・P-9	楕円形	0.6	0.3	36	N-80°-W	第40図
SK36	R-11・12	長方形	1.1	0.6	13	N-89°-W	第40図
SK37	R-12	楕円形	1.0	0.7	35	N-66°-E	第40図
SK38	Q・R-9		3.3	2.4	105	N-80°-E	第39図
SK39	P・Q-10		2.1	1.8	34	N-38°-E	第40図
SK40	P・Q-10・Q-11	円形	1.4	-	26	-	第40図
SK41	Q-10				7		第40図
SK42	Q・R-12		2.6	0.8	82	N-86°-W	第40図
SK43	N-9	長方形	2.0	1.1	42	N-89°-W	第40図
SK44	O-9	長方形	0.9	0.8	44	N-54°-E	第41図
SK45	O-9			幅0.9	53	N-12°-W	第41図
SK46	N-8・9	長方形	1.6	1.0	16	N-9°-W	第41図
SK47	O・P-8	長方形	1.5	1.2	40	N-79°-E	第41図
SK51	N-10		1.3		22	N-53°-W	第41図
SK52	O-10	楕円形	1.3	0.7	13	N-88°-E	第41図
SK53	Q-11				57		第41図
SK54	Q-11	楕円形	3.1	0.5	28	N-70°-E	第41図
SK55	Q-10		3.4	1.5	21	N-37°-E	第41図
SK56	P・Q-10	方形	1.3	0.8	28	N-63°-E	第41図
SK57	P-10	楕円形	1.2	0.9	48	N-18°-W	第41図
SK58	P-10		1.4	0.8	69	N-74°-E	第42図
SK59	P-10				47	N-20°-E	第42図
SK60	Q-9	楕円形	0.9	0.8	12	N-61°-E	第41図
SK61	Q-9	楕円形	1.2	0.8	6	N-20°-W	第41図
SK62	P-9・10			0.7	11	N-35°-W	第42図
SK63	P-9	長方形	1.3	0.8	45	N-13°-E	第42図
SK64	P-9	円形	0.5	-	54	-	第42図
SK65	P-9	楕円形	1.0	0.8	24	N-63°-E	第41図
SK66	P-9	長方形	0.9	0.7	16	N-29°-E	第42図

遺構名	グリッド	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	主軸方位	探図番号
SK67	P-9	長方形	3.3	0.8	14	N-81°-E	第42図
SK68	P-9	円形	0.4	-	46	-	第42図
SK69	P-9	楕円形	1.2	0.5	26	N-11°-W	第42図
SK70	P-9	円形	0.6	-	66	-	第42図
SK71	P-9	長方形	-	-	12	N-87°-E	第40図
SK72	P-9	長方形	-	0.7	21	N-87°-E	第40図
SK73	P-9	長方形	1.8	1.2	43	N-22°-W	第40図
SK74	P-9	長方形	1.7	1.1	35	N-90°	第42図
SK75	P-9	円形	1.0	-	20	-	第42図
SK76	P-9	楕円形	0.6	0.4	20	N-78°-E	第42図
SK77	P-9	方形	1.3	1.2	12	N-78°-E	第42図
SK78	O・P-9	楕円形	1.6	1.4	16	N-59°-W	第42図
SK79	O・P-9	楕円形	1.2	0.7	35	N-89°-W	第42図
SK80	O-9	長方形	-	幅0.7	25	N-90°	第43図
SK81	O-9	長方形	-	0.6	11	N-86°-E	第42図
SK82	O-9	長方形	-	0.7	24	N-85°-E	第43図
SK83	O-9	楕円形	1.1	0.6	34	N-53°-W	第42図
SK84	O-8・9	長方形	1.7	1.0	49	N-6°-W	第43図
SK85	O-9	長方形	1.0	0.6	29	N-24°-W	第43図
SK86	O-9	楕円形	1.4	1.1	16	N-46°-E	第43図
SK87	P-8・9	長方形	3.9	0.8	40	N-9°-W	第43図
SK88	P-8・9	長方形	1.1	0.8	14	N-9°-W	第43図
SK89	P-8	楕円形	0.8	0.5	52	N-35°-W	第43図
SK90	P-8	長方形	0.9	0.7	23	N-83°-E	第43図
SK91	O-8	長方形	1.2	0.6	24	N-35°-W	第39図
SK92	O-8	長方形	2.0	0.9	35	N-11°-W	第39図

第6号溝 (第46図)

S-10グリッドからT-12グリッドにかけて位置する。一部SD7・8に沿うように伸びる。全長30.0m、幅0.6m、深さ46cmを測る。SK23と重複する。

第7号溝 (第46図)

S-11グリッドからS-12グリッドにかけて位置する。SD6に沿うように伸びる。全長13.2m、幅0.5m、深さ23cmを測る。SK24と重複する。

第8号溝 (第46図)

R-9グリッドからS-11グリッドにかけて位置する。SX4を切って構築される。一部SD6に沿うように伸び、南部でSD11に接続する。全長26.9m、幅0.7m、深さ34cmを測る。

第9号溝 (第46・47図)

調査区東部の台地の落ち際を巡るようにL字形に伸びる。溝の断面形は逆台形を呈し、底面には小ピットを不規則に伴う。全長46.9m、幅1.3m、深さ106cmを測る。縄文時代早期のFP15、平安時代のSJ4を

切る。SK53、SD18と重複する。

覆土中から第47図2が出土した。15世紀後半の緑釉小皿である。出土遺物と遺構の形態から、中世の屋敷堀である可能性が高い。

第10号溝 (第46図)

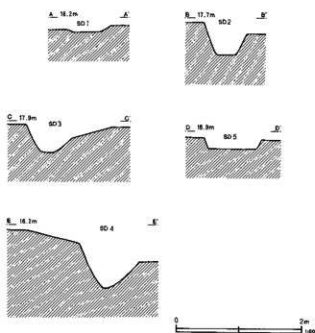
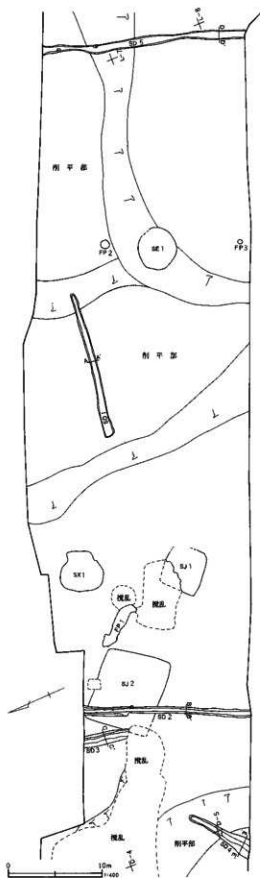
Q-11グリッドからR-11グリッドにかけて位置する。台地の等高線に沿うように、ほぼ東西方向に伸びる。東側をSX5に切られるが、SD11に接続してL字形に伸びるものと思われる。断面形はV字形を呈する。全長18.5m、幅0.9m、深さ67cmを測る。

遺物を出土しなかったため、構築時期は判然としないうが、溝の形態から、SD9と同様の屋敷堀であった可能性がある。

第11号溝 (第46図)

S-11グリッドからS-12グリッドにかけて位置する。SX5に切られる。SD10と接続して、L字形に伸びる。全長10.6m、幅1.1m、深さ50cmを測る。SD10と合わせて、屋敷堀だった可能性がある。

第45図 第1～5号溝



第12号溝 (第46図)

P-10グリッドからQ-10グリッドにかけて位置する。西側でSD17に接続する。全長12.4m、幅1.8m、深さ30cmを測る。縄文時代早期のFP5を切る。SK39～41・55と重複する。

第13号溝 (第46図)

O-9グリッドに位置する。全長0.9m、幅0.7m、深さ21cmを測る。SK44、SD18と重複する。

第14号溝 (第46図)

P-11グリッドに位置する。SX6に切られる。全長3.6m、幅0.9m、深さ31cmを測る。

第15号溝 (第46図)

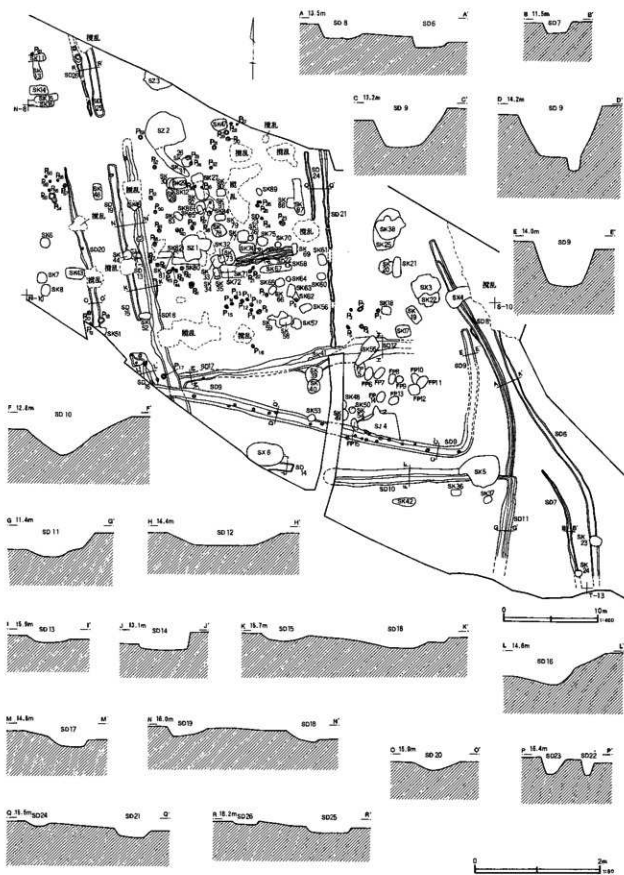
O-9グリッドからO-10グリッドにかけて位置する。SD19に接続する。全長5.0m、幅0.7m、深さ17cmを測る。SK52と重複する。

第16号溝 (第46・47図)

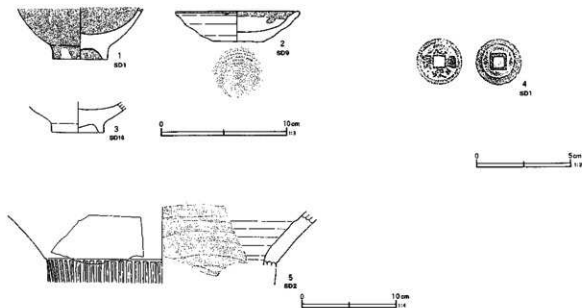
O-10グリッドに位置する。全長3.9m、幅1.5m、深さ55cmを測る。ピットを伴う。

覆土中から第47図3が出土した。碗の底部。17世紀のものである。

第46図 第6～26号溝・ピット



第47図 溝出土遺物



溝出土遺物観察表 (第47図)

番号	材質	産地	器種	口径	器高	底径	装飾	胎土色・色調	残存率	出土位置・備考		
1	陶器		碗	10.0	2.4	4.4	鉄釉	灰白	70	SD1		
2	陶器		緑釉小皿				4.0	4.0	緑釉	浅黄	80	SD9 底部回転糸切り痕
3	陶器		碗				4.2		無色釉	淡黄	70	SD16
4	銅製品		古銭	直径24.8mm、孔径5.8mm、厚さ1.45mm、重さ2.6g					100	SD1 寛水通寶		
5	瓦器		風炉					灰黄	5	SD2		

第17号溝 (第46図)

O-10グリッドに位置する。SD12に接続してまっすぐに伸び、SD18にはほぼ直角に繋がる。全長17.5m、幅1.0m、深さ36cmを測る。

第18号溝 (第46図)

O-8グリッドからO-11グリッドにかけて位置する。北西-南東方向に伸びて、SD17に直角に接続、SD9と交差する。全長29.0m、幅0.9m、深さ28cmを測る。SK45・52、SD13と重複する。

第19号溝 (第46図)

N-8グリッドからN-9グリッドにかけて位置する。SD18に沿って伸びる。全長9.3m、幅0.7m、深さ19cmを測る。SK44と重複する。

第20号溝 (第46図)

N-8グリッドからN-10グリッドにかけて位置

する。全長17.3m、幅0.8m、深さ26cmを測る。SK51と重複する。

第21号溝 (第46図)

Q-8グリッドからQ-10グリッドにかけて位置する。途切れながら南北方向に伸びる。全長21.0m、幅0.6m、深さ31cmを測る。

第22号溝 (第46図)

P-9グリッドに位置する。全長6.4m、幅0.4m、深さ34cmを測る。SK69と重複する。

第23号溝 (第46図)

P-9グリッドに位置する。全長6.3m、幅0.5m、深さ32cmを測る。SK69と重複する。

第24号溝 (第46図)

P-8グリッドからQ-8グリッドにかけて位置する。SD21に沿うように伸びる。全長7.3m、幅0.4

ビット一覧表

遺構名	グリッド	最大径 (cm)	深さ (cm)
P ₁	Q-10	32	11
P ₂	Q-10	60	14
P ₃	Q-10	22	13
P ₄	Q-10	40	25
P ₅	Q-10	39	40
P ₆	P-9・10	31	22
P ₇	P-9	32	25
P ₈	P-10	53	59
P ₉	P-10	29	19
P ₁₀	P-10	29	21
P ₁₁	P-9・10	32	25
P ₁₂	P-10	32	25
P ₁₃	P-9	38	36
P ₁₄	P-10	31	25
P ₁₅	P-10	43	20
P ₁₆	P-10	32	40
P ₁₇	O-10	45	21
P ₁₈	N-10	63	13
P ₁₉	N-10	26	32
P ₂₀	N-10	40	38
P ₂₁	P-9	34	21
P ₂₂	P-9	30	15
P ₂₃	P-9	56	49
P ₂₄	P-9	25	59
P ₂₅	P-9	37	31
P ₂₆	P-8・9	42	36
P ₂₇	P-8	17	6
P ₂₈	P-8	29	14
P ₂₉	P-8	50	12
P ₃₀	P-8	45	34
P ₃₁	O-8	39	31

遺構名	グリッド	最大径 (cm)	深さ (cm)
P ₃₂	O-8	26	36
P ₃₃	O-8	54	17
P ₃₄	O-8	27	25
P ₃₅	O-8	19	10
P ₃₆	O-8	21	31
P ₃₇	O-9	21	21
P ₃₈	O-9	44	46
P ₃₉	O-9	34	51
P ₄₀	O-9	41	26
P ₄₁	O-9	64	31
P ₄₂	O-9	35	8
P ₄₃	O-9	35	6
P ₄₄	O-9	35	9
P ₄₅	O-9	63	16
P ₄₆	O-9	43	34
P ₄₇	O-9	31	20
P ₄₈	O-9	43	17
P ₄₉	O-9	33	16
P ₅₀	O-9	33	13
P ₅₁	O-8	38	23
P ₅₂	O-8	39	42
P ₅₃	O-8	44	19
P ₅₄	N-9	55	21
P ₅₅	N-8・9	72	7
P ₅₆	N-8	31	4
P ₅₇	N-8	34	10
P ₅₈	N-8	24	5
P ₅₉	N-8	23	23
P ₆₀	N-8	21	31
P ₆₁	N-7	29	63

m、深さ14cmを測る。

第25号溝 (第46図)

N-7グリッドに位置する。SD26に沿うように伸びる。全長7.2m、幅0.8m、深さ22cmを測る。

第26号溝 (第46図)

N-7グリッドに位置する。SD25に沿うように伸びる。全長8.9m、幅0.4m、深さ9cmを測る。

(5) ビット (第46図)

単独のビットは61基検出された。分布は調査区の東部のSD12・15・17・19に囲まれる区域に、特に偏在する。規模は、多くのものが幅約30~40cm、深さ約20~30cmで、大きさから古さを感じさせるものはない。覆土もほとんどのものが、しまりの弱い黒色土ま

たは黄褐色土であることから、近世以降のものと思われる。個別の遺構の計測値は、ビット一覧表を参照されたい。

遺構新旧対照表

遺構名	旧名	時期	遺構名	旧名	時期
第1号住居跡		古墳前期	第39号土塚		近世
第2号住居跡		古墳前期	第40号土塚		中・近世
第3号住居跡		古墳前期	第41号土塚		中・近世
第4号住居跡	第5号住居跡	平安時代	第42号土塚		中・近世
第1号炉穴		縄文早期	第43号土塚		中・近世
第2号炉穴		縄文早期	第44号土塚		中・近世
第3号炉穴		縄文早期	第45号土塚		中・近世
第4号炉穴		縄文早期	第46号土塚		中・近世
第5号炉穴	第29号土塚	縄文早期	第47号土塚	第103号土塚	中・近世
第6号炉穴	第30号土塚	縄文早期	第48号土塚		縄文早期
第7号炉穴	第28号土塚	縄文早期	第49号土塚		縄文早期
第8号炉穴	第32号土塚	縄文早期	第50号土塚		縄文早期
第9号炉穴	第34号土塚	縄文早期	第51号土塚		中・近世
第10号炉穴	第35号土塚	縄文早期	第52号土塚	第42号土塚	中・近世
第11号炉穴	第26号土塚	縄文早期	第53号土塚	第13号溝	中・近世
第12号炉穴	第27号土塚	縄文早期	第54号土塚		中・近世
第13号炉穴	第33号土塚	縄文早期	第55号土塚		中・近世
第14号炉穴	第31号土塚	縄文早期	第56号土塚		中・近世
第15号炉穴	第47号土塚	縄文早期	第57号土塚		中・近世
第1号土塚		縄文早期	第58号土塚		中・近世
第2号土塚		縄文早期	第59号土塚		中・近世
第3号土塚		縄文早期	第60号土塚		中・近世
第4号土塚		縄文早期	第61号土塚		中・近世
第5号土塚		縄文早期	第62号土塚		中・近世
第6号土塚		縄文早期	第63号土塚		中・近世
第7号土塚		縄文早期	第64号土塚		中・近世
第8号土塚		縄文早期	第65号土塚		中・近世
第9号土塚		中・近世	第66号土塚		中・近世
第10号土塚		中・近世	第67号土塚		中・近世
第11号土塚		中・近世	第68号土塚		中・近世
第12号土塚	第96号土塚	中・近世	第69号土塚		中・近世
第13号土塚		中・近世	第70号土塚		中・近世
第14号土塚		中・近世	第71号土塚		中・近世
第15号土塚		中・近世	第72号土塚		中・近世
第16号土塚		中・近世	第73号土塚		中・近世
第17号土塚		近世	第74号土塚		中・近世
第18号土塚		近世	第75号土塚		中・近世
第19号土塚		近世	第76号土塚		中・近世
第20号土塚		近世	第77号土塚		中・近世
第21号土塚		近世	第78号土塚		中・近世
第22号土塚		近世	第79号土塚		中・近世
第23号土塚		近世	第80号土塚		中・近世
第24号土塚		近世	第81号土塚		中・近世
第25号土塚		近世	第82号土塚		中・近世
第26号土塚	第97号土塚	中・近世	第83号土塚		中・近世
第27号土塚	第93号土塚	中・近世	第84号土塚		中・近世
第28号土塚	第94号土塚	中・近世	第85号土塚		中・近世
第29号土塚	第95号土塚	中・近世	第86号土塚		中・近世
第30号土塚	第97号土塚	中・近世	第87号土塚		中・近世
第31号土塚	第98号土塚	中・近世	第88号土塚		中・近世
第32号土塚	第99号土塚	中・近世	第89号土塚		中・近世
第33号土塚	第100号土塚	中・近世	第90号土塚		中・近世
第34号土塚	第101号土塚	中・近世	第91号土塚		中・近世
第35号土塚	第102号土塚	中・近世	第92号土塚		中・近世
第36号土塚		中・近世			
第37号土塚		中・近世			
第38号土塚		中・近世			

遺構名	旧名	時期
第1号井戸		中世
第1号地下式竈		中世
第2号地下式竈		中世
第3号地下式竈		中世
第4号地下式竈		中世
第5号地下式竈		中世
第6号地下式竈		中世
第1号地下室	第7号地下式竈	中・近世
第2号地下室	第8号地下式竈	中・近世
第3号地下室	第9号地下式竈	中・近世
第1号溝		近世
第2号溝		中・近世
第3号溝		中・近世
第4号溝		中・近世
第5号溝		中・近世
第6号溝		中・近世
第7号溝		中・近世
第8号溝		中・近世

遺構名	旧名	時期
第9号溝		中世
第10号溝	第10号溝	中・近世
第11号溝		中・近世
第12号溝		中・近世
第13号溝	第19号溝	中・近世
第14号溝		中・近世
第15号溝	第19号溝	中・近世
第16号溝		中・近世
第17号溝		中・近世
第18号溝		中・近世
第19号溝		中・近世
第20号溝		中・近世
第21号溝		中・近世
第22号溝		中・近世
第23号溝		中・近世
第24号溝		中・近世
第25号溝		中・近世
第26号溝		中・近世

V まとめ

今回の調査で検出された縄文時代早期の遺構と出土土器についてまとめる。

縄文時代早期の遺構は、炉穴15基、土壇11基である。これらの遺構の分布を見ると、概ね四ヶ所のまとまりが認められる(第4・12・46図)。すなわち、第1遺構群は調査区西部のFP1、第2遺構群はFP2・3、第3遺構群は調査区中央部東側のFP4とSK1～8、第4遺構群はR-11杭周辺部のFP5～15とSK48～50である。

第1遺構群のFP1は、調査区内で最も標高の高い部分である。FP1が1基のみであるが、FP1自体何度が反復使用された痕跡があり、他の遺構群と同様に、複数の炉穴と考えることができる。FP1出土土器は、条痕文土器だけで有文土器を伴わないが、グリッド出土の野鳥式土器が、FP1周辺部から出土していることから(第16図13～20)、FP1は野鳥式期に形成された可能性が高い。

第2遺構群は、FP2・3の2基で、FP1とFP4の中間に位置する。いずれも炉床部の痕跡のみであるが、後世の削平以前には遺構のまとまりがあった可能性もある。

第3遺構群は、調査区中央部東側のFP4とSK1～8のまとまりである。なだらかに傾斜する平坦部に分布している。出土土器は、FP4とSK5からまとまって出土したのと、SK3・4などから破片が数片出土している(第11・15図)。有文土器ではいずれも鶺鴒ヶ島台式土器が出土しており、この遺構群は鶺鴒ヶ島台式期に形成されたものといえよう。

第4遺構群はFP5～15、SK48～50のまとまりで、平坦部から南斜面にさしかかった区域に分布する。炉穴は多くが楕円形で長軸を南北方向にとり、炉床部も底面の北側に位置するものが目立つ。重複が少なく、反復使用した痕跡は見られない。出土土器は数片の条痕文土器であり、時期を特定できないが、野鳥式期または鶺鴒ヶ島台式期に形成されたものと思われる。

以上の四つの遺構群は、それぞれ40～50mの間隔を持って、台地の尾根上に分布している。しかもこれらのうち、第1遺構群は野鳥式期、第3遺構群は鶺鴒ヶ島台式期に形成されており、各時期によって占地を変えていることがわかる。

次に、出土土器の特徴について簡単にまとめる。遺物がある程度まとまって出土した遺構は、FP1・4、SK5である。これらを中心にSK3・4、グリッド出土の野鳥式、鶺鴒ヶ島台式を含めて概観する。

野鳥式土器は、いずれもグリッド出土のもので、FP1周辺部から出土している。三種に分類できる。第1類は、微隆線によって口辺部に梯子状の文様を描くもので、第16図19・20がこれにあたる。第2類は、隆線で区画文を描き、斜沈線を充填するもの。第16図17・18である。第3類は幅広の沈線で区画し、細沈線を斜めに充填するもの。第16図13～16である。第2類と第3類の区画文は、幾何学状の文様構成となり、鶺鴒ヶ島台式に共通する。第1類は、第2・3類とは文様構成が異なり、野鳥式の中でも古段階のものと思われる。

鶺鴒ヶ島台式土器のなかで最も多く出土したのは、細沈線で区画し、半截竹管状工具で充填沈線と刺突文を施すものである。第1類とする。FP4およびSK3～5出土土器、グリッド出土土器の中に見られる。区画文はいずれも櫛状区画文と思われるが、第11図2は一部弧状に区画する。第15図3、第16図21は、無文帯の段を伴い、2段の文様構成になる。第2類は、やや細い棒状工具で区画文と斜沈線、刺突文を描くもの。第16図6で、第1類とは施工具が異なる。第3類は、隆線で櫛状区画文を描き、半截竹管で充填沈線と刺突文を施すもの。SK5出土土器(第15図26)である。段が伴わず、胴部文様帯が1段のみの構成であること、底部が尖底に近い形状であることから、鶺鴒ヶ島台式の中でも古段階に相当するものと思われる。

写真図版



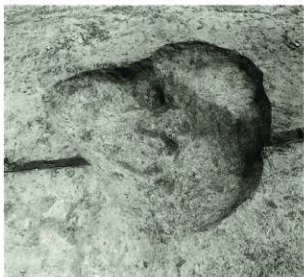
道合高木前遺跡遠景



道合高木前遺跡近景



第1号炉跡



第4号炉跡



第5~7号炉跡



第10~12号炉跡



第1号住居跡



第2号住居跡



第3号住居跡



第4号住居跡



第1号井戸跡



第1号地下式墳



第2号地下式墳



第3号地下式墳



第 4 号地下式墳



第 5 号地下式墳



第 6 号地下式墳



第 1 号地下室



第 2 号地下室



第 9 号溝



第1号炉穴(第7图2)



第1号炉穴(第8图3)



第4号炉穴(第11图1)



第5号土坑(第15图26)



第1号住居跡(第18图2)



第2号住居跡(第22图1)



第 2 号住居跡 (第22図 3)



第 2 号住居跡 (第22図 4)



第 2 号住居跡 (第22図 5)



第 2 号住居跡 (第22図 6)



第 2 号住居跡 (第22図 7)



第 2 号住居跡 (第22図 10)



第 2 号住居跡(第22图11)



第 2 号住居跡(第22图14)



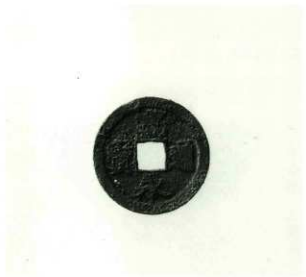
第 1 号地下式壙(第37图 7)



第 2 号地下式壙(第37图 6)



第 3 号地下式壙(第37图 5)



第 1 号溝(第47图 4)



第4号住居跡 (第25図1)



第4号住居跡 (第25図2)



第4号住居跡 (第25図3)



第4号住居跡 (第25図4)



第4号住居跡 (第25図5)



第4号住居跡 (第25図7)



第2号地下式墳 (第37図1)



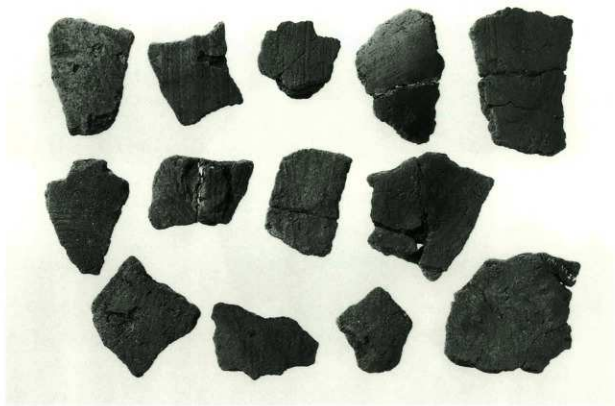
第9号溝 (第47図2)



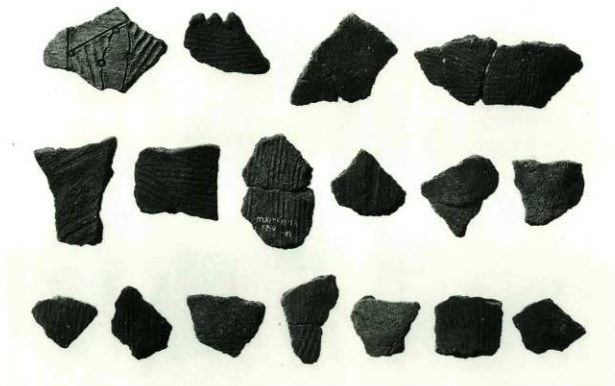
第1号炉穴(1)(第7图)



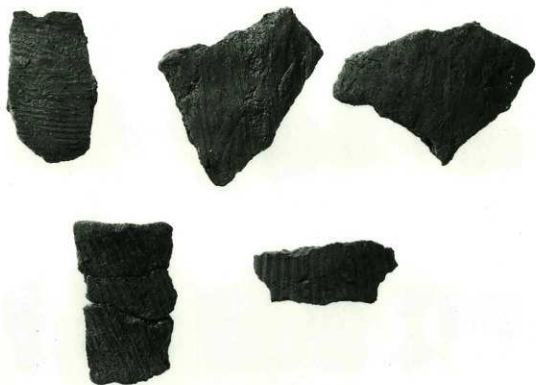
第1号炉穴(2)(第8图)



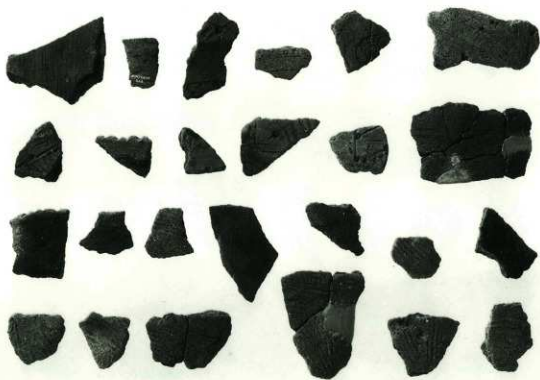
第1号炉穴(3)(第9图)



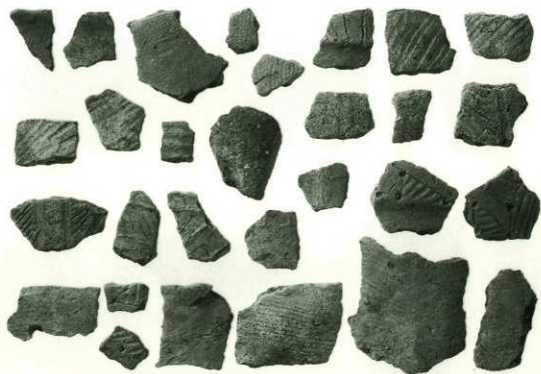
第4号炉穴(第11图)



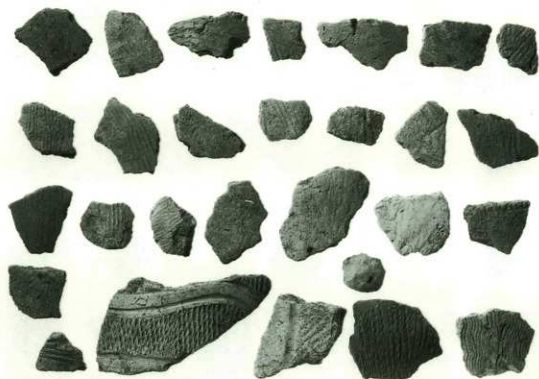
第5~7·12号炉穴(第13图)



第1·3~5号土壤(第15图)



グリッド出土土器（1）（第16図1～29）



グリッド出土土器（2）（第16図30～42・第17図）

報告書抄録

ふりがな		みちあいたかぎまえ いせき						
書名		道合高木前遺跡						
副書名		都市計画道路大宮東京線建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告						
巻次								
シリーズ名		埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書						
シリーズ番号		第236集						
編著者名		君島勝秀						
編集機関		財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団						
所在地		〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1 TEL 0493-39-3955						
発行年月日		西暦2000(平成12)年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 . . .	東経 . . .	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みちあいたかぎまえ 道合高木前 いせき 遺跡	さいたまけんかわごえしおとあき 埼玉県川口市大字 みちあいたかぎまえ 道合字高木前	11203	61	35°50'37"	139°43'27"	19980401 ~0531 19980901 ~1130 19990601 ~0630	5.600	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
道合高木前 遺跡	集落跡	縄文時代早期	炉穴15基・土壇11基	縄文土器・磨石・石鏃				
		古墳時代前期	住居跡3軒	土師器				
		平安時代	住居跡1軒	須恵器				
	中・近世	井戸跡1基・地下式 塋6基・地下室3基 ・土壇81基・溝26条・ ピット61基	土器・焙烙・摺鉢・陶磁器・青磁合子蓋・古銭					

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第236集

川口市

道合高木前遺跡

都市計画道路大宮東京線建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成12年3月15日 印刷
平成12年3月24日 発行

発行/財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108 埼玉県大里郡大里村船木台4-4-1
電話 0493(39)3955

印刷/誠美堂印刷株式会社